
空を染めて

N.T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空を染めて

【Nコード】

N22040

【作者名】

N・T

【あらすじ】

主人公はちよつと変わった高校生。

容姿端麗、成績優秀、まさに才色兼備。だが……普通じゃない。

いい優等生のはずなのに……本人はそんなことを考えてもない。

女の子と付き合いたいけど……告白されても付き合わない。

絶対おかしい。

そんな主人公、本当は――

目を開いても、閉じてても、見えるもの

「ねえ、知ってる？」

君はいきなりそう言い出した。僕らの目の前には赤、橙、白、青、藍と色を変えている空がある。寝転がった草の匂いが鼻をくすぐる。とても静かで平穏なはずなのに、どこか不安がぬぐえない。君はちゃんとそこにいるのだろうか。

「ん？」

僕は空から目をそらさない。そらせない。君の姿を見ることができない。おかしい。冷静になろうとした。本当に君がそこにいるのか、分からなくなる。

「空の色が変わるのは、世界が関係してるんだって」

「なんじゃそりゃ」

とりあえず、苦笑。君の声が聞こえているのだから、きっと君はそこにいるのだと信じて。

「本当よ。空が赤に染まるのは、世界中の人が笑うから」

視界の端に、空の赤を指す君の指が見える。ああ、やっぱり君はそこにいるんだと安心した。

「空が藍に染まるのは、世界中の人が眠いから」

「空が橙に染まるのは、世界中の人が嬉しいから」

「空が青に染まるのは、世界中の人が笑うから」

「そして。空が白に染まるのは、この世の誰かが悲しいからなんだよ」

君の、顔が、見えて。にっこり、笑って。

君が、何か、呟いた。

ほっぺをつねっても見えるもの

ピピッ

ピピッ

ピピッ

「ん．．．．．む」

カチッ

目覚ましを止めて、ゆるゆるとまたまぶたを閉じる。さっきのは夢か．．．．．。頭ではそう思いつつも、体はしばらくの幸せな時間に戻ろうとする。いわゆる二度寝というやつ。頭と体はしばらく小さな言い争いを続けていたのだが、すぐに決着が付く。頭は考えることを止め、体はさっきのように幸せな時間に戻った。頭とともに。

二度寝決定。

体制を変えようと寝返りを打ち、薄目を開けると。

「ふああ、おはようございます」

．．．．．

ぶかぶかのパジャマ——あれは僕のだ——を着た、長い髪の美少女が片手で目をこすり、片手を上に伸ばしてグウッと伸びをしていた。僕の、隣に。紗の布が少し邪魔だが、そのままほっぺをつねってみる。

「痛い」

少女がおかしそうに笑って言った。

「そりゃあ、ほおをつねれば痛いですよ。あ、もしかして夢だと思ってたとか？」

ころころと笑う少女はまるで鈴のよう．．．．．とは、言います

ぎかなあ？とりあえず、そろそろと少女から離れる僕。おかしい。
絶対おかしい。

「何があったんだ」

「何って……いろいろ」

一気に。ベッドから飛び降り向こう側の壁まで後ずさる。目隠し用の紗の布をはぎとる。眠気は、すっかりなくなっていた。

「思い出せ、僕！一体何があったんだ！ああ、もう、こういうときに限って役立たずだな！！」

ぶんぶん頭を振って思い出そうとする僕。それを見て、目を丸くする少女。安心させようとしたのか、右手をピンと上げてこう宣言した。

「あ、大丈夫ですよ。先輩。あたしたちは清い仲ですから！」

「そう言ってくれるのはうれしいが、誤解を招くような言い方をすんな！！！」

僕の声は、おそらく防音に改装した部屋を通り越して、半径50メートルのご近所に響き渡った。

そこにないけど見えるもの

現実だった。隣に美少女なんていうゲーム的な展開は、ほっぺをつねっても変わらなかった。

とりあえず少女を着替えさせ、僕も部屋の外で着替える。

「まず、質問しよう」

目の前に座らせた少女は、セーラー服姿だ。僕は、当たり前ながら私服。

「はい、先輩」

「君は誰だ」

朝から大声を出して、僕は疲れていた。肉体的というより、精神的に。おかげで声が低い。

「やだなあ、先輩。忘れちゃったんですか？ 同じ高校の後輩じゃありませんか」

うちの学校。

「先輩は350人以上いるぞ」

頭がフル活動して思い出そうとしているが、何も思い出せない。と言うか、昨日の夜の記憶がない。つまり、昨日の夜何かあったはず………なんだが。

「あと、先輩の勤めてる探偵社の、あたらしい見習いエージェント」
ぼんやり思い出してきた。昨日の夜は確か。

「えーっと、確か名前は――綱手^{つなで}」

「綱手あつ。名前はワ行の『る』ですよ」

完全ではないが、全体の骨格が見えてきた。

そう、昨日の夜所長が僕らエージェントを呼び出し、彼女を紹介したんだ。そこから宴会が始まって………そして………。

「なんで宴会から、僕と君が同じベッドに入ることになったんだ？」
綱手はいたずらを仕掛けた子供の笑顔を見せ、説明してくれた。

「宴会になったとこまでは覚えてるんですね。他のエーリエントさんたちがお酒を飲みだしたの、忘れました？しばらくしたら泡の切れたビールを麦茶と間違えて、先輩が飲んじやったんですよ。ひと口飲んですぐ吐き捨てたのに、先輩倒れちゃって。仕方ないんで、あたしが部屋に運んだんですよ。そのときに所長さんが『あなたの部屋、まだないからその部の部屋で寝ればいいわ』っていうもんですから」

「……そんなことしたのか。っていうか、所長！」

「それで、一緒に寝たっていうのか！」

僕は盛大に、ため息をついた。

見たなくても見えるもの

それが真実なら・・・

「ちさ姉!! 何言ってるんだよ!」

ゐつに来るよう言ってる僕は二階から駆け下りる。三段飛ばし。そのまま台所にひとつぱしり。

三十過ぎのおば——いやいや、お姉さんが朝ごはんを作っていた。ゆうゆうと作業を続けながらこう言ってくる。

「別に? 隼じゅんならゐつちゃんを襲うこともないでしょう? 他のバカなやつらよりずっとましよ。なんたって隼は」

「もういい。どーせ僕は童貞ですよ」

「あゝ、拗ねた」

鈴木智佐子。僕らが勤める組織の日本の所長である。とても三十路過ぎとは思えない容姿ではあるが、中身が古い。なんせ古すぎて壊れているくらいなのだ。そう、思春期の男女を同じベッドに同衾させるくらい。

「ちよつと、なんか頭の中で変なこと言わなかった?」

鬼が、こちらを、振り向く。こ、こわっ・・・

「べ、別に」

目を合わせないようにずっとフライパンのほうに目をやると。

「あーっ! ベーコンエッグ焦げてんじゃねえか! ちゃんと見ててよ、ちさ姉!」

・・・その後、朝食にはパン、スープ、サラダ、そして焦げたベーコンエッグが並んだ。

「ふああ。んで、どうだった? 初めて女の子と寝た感想は?」

「あ、それオレも聞きたい。それにお前が珍しく洋服着てるわけも」
黙々にご飯を食べている僕に、他のエージェントたちが冷やかしを入れてくる。

「涼、それは年齢制限つきのほうなのか、付いてないほうか分らないけど。僕はゐつには何もしてないよ。あと陸、僕だっていつも和服着てるわけじゃあないんだからね。——てか2人とも、もうすこしキレイに朝飯食べろよ!」

ぼろぼろとパンのくずを落とし、耳を食べない涼。たまごの白身とベーコンだけを食べ、黄身を残す陸。

「今日の掃除は涼と陸がやってくれるわよ、きつと。」

所長の一言で2人は家中の掃除をする羽目になったのだった。

どんなときでも見えるもの

つくづく思う。所長を怒らせてはいけない。

その目が、見たくもないのに見えるからだ。

「ごめんよ、ちさ姉。謝るからさ」

涼と陸が半べそで草むしり。ちょうどいいからとやらされている。可哀想にとは思うが、手伝う気はない。

「これ終わったら、窓拭きもお願いね。……分かった？」
氷の瞳。冷たい。冷たすぎる。

「助けてくれよ、あつちゃん。隼はどーせ助けてくれないんだよ」
「あい？なんか言ったか、2人とも」

目線には自信がある。人が思わず見蕩れるようで、でも拒みたくなる目線。

「うわっ！やめろやめろ、お前は仲間を毒牙にかけたりするのか」
成功。2人とも真っ赤になって向こうを向いた。別に男を誘惑する趣味はないが、反応を見ているのは実に面白い。恋する乙女のようにさっと顔を赤らめ、少し目が潤み、困ったように苦笑いをする。
「やめなさい、隼。あなたの目は私より怖いんだもの」

所長にとめられる。いじめるのが趣味でもないので、やめておく。

「はい、コーヒー。ごくろーさん」

雑用という雑用をほとんどさせられ……。いや、快くした2人にご褒美を。

「わっ！サンキュー、隼。お前のクッキー大好き！」

さすがに良心が咎めたのだ。2人の大好きなクッキーを焼いてやったら、このとおりだ。すぐに2人の前の大皿からクッキーが消えていく。所長とあつには分けて配った。

「先輩って料理上手いんですね……。うらやましいな」

ひと口かじってあつが言う。パッチリとした目がくりりと大きく

なる。

「いや、冷凍してあった生地を焼いただけだし。そう難しいものじゃない」

今度やってみるかと言え、あつは苦笑いした。

「あたし、料理の『り』の字も知りませんし」

後日知る。それは謙遜でもなんでもないということに。

「ほらほら、明日からまた学校でしょ。隼、宿題終わってるの？あつ、あなたも課題があったんじゃない？明日の準備だってあるんだし。さきに準備してきなさいよ」

「それじゃ俺たちは――」

「――ここで！」

玄関からそそくさと逃げようとする涼と陸。その背中に、槍が刺さった。

「待ちなさい。まだ話は終わってないのよ？せっかちなえ。買い物リスト、渡してないじゃない」

・・・・・・まだ働かせるつもりのようなだ。

起きて一番に見えるもの

寝る前に薬、と渡された少々多めの薬を辟易しながら飲み下し、早めに眠ることにした。

一人の部屋でメガネをはずし、ゆっくり目を閉じる。どんなときでも、見えるのは目蓋^{まぶた}だけ。

また今日が終わろうとしていた。

コンコン

「ねえ、隼？まだ寝てない？」
ちさ姉だ。

「あ、ちょっと待って。すぐ開けるから」
あわててメガネをかけ、横のボタンに手を伸ばす。電子音がしてロックが外れた。ちさ姉は——いや、所長は仕事の口調で話し出した。

「あつちゃんのことだね——」

「はい」

メタルフレームのメガネを下におろして、直接所長を見る。所長は紫苑——僕の暗号名^{コードネーム}だ——と僕を呼び、何も無いはずのところを見つめた。

「あの子の暗号名は^{クイント}quint。今日からあなたが教育する子よ」

「見習いなのに、もう暗号名をつけたんですか」

「まあ、ね……ちよつと事情があるのよ」

珍しく所長は言うのをためらっているようだ。

「言え、と命令してみましようか？」

左手でメガネをはずす。

「分かった、分かった。喋らないとは言っていないでしょ……
・ボスからの指令なのよ。あの子を、紫苑に、教育させろって。今から口頭で言うから、覚えなさいよ」

一番面倒な仕事が舞い込んだ。そんな感じがした。でも、所長で

はなくボスの指示となると……逆らえない。

「りょーかい」

「綱手ゐつ、15歳。生年月日1994年5月5日。身長165cm強、体重45kg強。能力は、尋常じゃない運動神経。一度決めたらためらわない、意思。基本的に運動神経が先に立つけどね。頭脳は、普通。頭脳がたつ紫苑といいんじゃないかってことだけどー」

分かっている。所長は疑問に思っているのだ。ボスがなぜ、ゐつを入れたのか。頭脳が働かないやつは、ここにはいない。なのに、ゐつは。

「ゐつは普通の人間ですよ。運動能力が尋常じゃないとしても、特別な技能を持っているわけでもない。所長はボスを疑っているわけだ。ん、言い方がおかしいですね。ゐつを、疑っている」

そういうわけじゃないけど、意味のない言い訳をして立ち上がる所長。こちらを向かずにとただ一言、こう言った。

「気をつけなさい」

「それじゃ、おやすみ」

明かりも何もつけていなかった部屋から、ちさ姉が出て行く。

「……綱手ゐつ、15歳。生年月日1994年5月5日。身長165cm強、体重45kg強。能力は、尋常じゃない運動神経。一度決めたらためらわない、意思。基本的に運動神経が先に立つけどね。頭脳は、普通。頭脳がたつ紫苑といいんじゃないかってことだけど、か。あいつがね——」

メガネをベッド脇のサイドテーブルに置き、紗の布で目を隠し、ベッドにもぐる。朝見たあの少女が、何者なのか。考えてみたが、薬が効いてきたのか考えはまとまらないままだ。

目蓋が重い。全ては明日に——

「ゐつ——quint」

2人の間に見えるもの——ちよつと番外編——

ピピッ

ピピッ

ピピッ

「……ん、ぐ」

カチッ

朝起きて一番最初に見るものは人それぞれだ。僕にとってはそれが紗の布。片端を引けば、はらりと苦も無くほどけてしまう。それからメタルフレームのメガネをかけ、僕の一日は始まるのだ。

「今日の当番って……自分か」

この家には4人のエージェント、1人の見習いが住んでいる。ちさ姉、涼、陸、そして僕がエージェント。あつが見習いだ。入ったばかりのあつはよく知らないが、今まで一緒に住んできた仲間は、大体料理ができる。そこで、今までは日替わりの当番制で炊事してきた。まだそれは変わっていないので、今日は僕が当番のはず。

ささつと着替えて下におりると、やはり誰も起きていなかった。

とりあえず新聞を新聞受けから取り、朝飯とお弁当を同時に作り始める。まだ朝早く静かな台所に、野菜を切る音とゆで卵の鍋の音がよく響く。フライパンも加わり、昨日の晩作っておいた小さなハンバーグを焼き始めると、台所はにぎやかになり、僕は忙しくなりだした。

それから十数分が経過。

「よし、お弁当はできたな。テーブルのセッティング、と……」

それができたら洗濯物だ。洗濯機にかけておいたものを庭に干す。新聞によると今日の洗濯物指数は100%。ま、よほどのことがない限り乾くだろ。

「ふああ、おはよう、隼。今日の新聞は？」

陸が起きてきた。

「陸、おはよ。居間のローテーブルにある…………涼は？一緒に寝てるのに、起こさなかったのか？」

ぱっと見では区別の付かない、一卵性双生児の涼と陸。いい大人であるにもかかわらずいまだに2人で一緒に寝ている…………ただのブラコンだ。

「隼、おはよー。気分はどうだ？」

「おはよ、涼。別に、普通だけど。すこぶるいい」

涼はエージェントでもあり、僕の主治医——ほとんどのエージェントはこの仕事以外にも仕事を持っている——でもある。

「本人がそう言っているんだから心配ないよ。歯磨きしよ、涼」
陸が目をごすりながら洗面台に向かうのを見て、そそくさといっていく涼。邪魔者はいなくなった。台所に戻り、朝飯の最終準備に入る。

「ちさ姉、起きて！…………あつも起きないと遅刻するぞ」

飛び出してきた2人。ちさ姉はまだパジャマ姿だが、あつはちゃんと着替えている。

「さあ、食べるぞ。今日非番なんですよ、ちさ姉。食器片付けてくれない？」

「いいわよ。そのくらいするわ」

「あ。隼、ケチャップ取ってー」

「おい、あつちゃん。早く食べないと。隼はろくに食べねーからゆっくりしてるんだから」

「は、はひ（はい）…………先輩、これすっごくおいしいです！」

「お、そうか？よかったよかった。ごちそうさま」

「隼、薬飲めよー。——新しく入れた薬が効いてるのかな」

「…………おええ、いつもながらひどい味」

「ごちそうさまでした！」

「おそまつさま、あつ。早く歯磨きして。もう行くぞ。ああ、歯磨

きしたのに菓の味がまだする」

「嫌ならその虚弱体質をどうにかすることね。こら、涼、陸！ごはんにマヨネーズ、かけない！」

「先輩、準備できました。Let's go!です！」

「はいはい。それじゃ頼んだよ、片付け。いってきまあす」

「みなさん、いってきまーす！」

「「「いってらっしゃーい」「」」

今日から新学期。僕は2年生になって後輩を迎える。その後輩が
あつ。クラス替えや担任など、楽しみなこともあれば、テストや退
屈な話など、いやなこともある。それを全部ひっくるめて、僕はあ
つと高校への道のりをわくわくしながら歩いた。

2人の間に見えるもの——ちよつと番外編——（後書き）

これはちよつとした番外編です。．．．．．いや、書きたくな
ったんですよ。このエージェントたちを。あと、これを書かないと
隼がよく分からなくなるんで。

見てくださる方。こんな小説を読んできてありがとうございます
います！不束者ですが、これからよろしく願いします。

話の中から見えるもの

よく、振った女の子から聞かれることがある。「あなたは同性愛者か」と。「別にそーでもない」と返せば「ならどうしてアイツとは」と迫られる。

「おい、おい森羅^{しんら}。テスト、どうだった？」

「いいよなあ、お前は勉強する必要がなくて――イタツ、背中叩くな！」

「しっかりしろって。今日の放課は部活オリエンテーションだぞ？ 1年生を2人ほど確保しないと」

数奇屋橋^{すきやばし} 森羅。森羅と僕は2才からずっと親友だ。いわゆる竹馬の友というやつ。森羅こそ、僕が同性愛者と間違えられる原因となっている。登下校が一緒、休み時間は大抵2人でいる、ご飯を一緒に食べている、どこに行くにも何をするにも2人。実際は違うのだが、そんな噂がまことしやかに流れている。

「そーいや、今日女の子と登校してきたんだって？ 学校中が沸いてたぞ」

おれを置いて行ってさ、と森羅。

「むくれんなよ。あつは新しい見習い。住み込みだから一緒に来ただけ」

「本当にかあ？ んじゃ俺が狙っちゃうぞ？ ずいぶん可愛いみたいだし」

持っていた英和辞書で頭を殴る。

「ぐっ……！！辞書で殴ることねえだろ！」

「あほなこと言うからだよ。僕は色恋沙汰に興味……あるけどさ。あつはただの見習い。部下。それ以上にもそれ以下にもならない。ちさ姉と一緒にだよ。ちさ姉は所長。それ以上にもそれ以下にもならない。敢えて言うなら『家族』って部類に入るくらいだろ」

「お前ってホントに優しいのか冷酷なのか、天使なのか悪魔なのか

分かんなくなるよ」

「とにかく部活オリエンテーションのことだが」

「話変えんなよ！」

森羅の道化じみたツツコミに、新しい教室は盛大に沸いた。

『では、最後の部活です。どうぞ！』

司会の女の子の声に押され、前に出る僕ら。いまは部活オリエンテーション。

「はじめまして、新入生の皆さん。僕たちはさまざまな問題の解決を専門とする——」

「通称探偵倶楽部です！」

「先に通称言っとうするんだよ。T高校内特設総合問題解決倶楽部です。ずいぶん名前が長いということで探偵倶楽部と呼ばれています。活動内容は——」

「頼まれたことならなんでもやります。犯罪以外。あ、色恋沙汰の相談には乗りますが、成就させてくれというのは無理です」

「まだ設置されて1年しか経っていませんが、やりがいのある部です。社会に出て問題にぶつかったとき、ここでの経験が役立つはず！」

「活動日は部長——つまりこの隼君が学校に来ているときです」

「活動場所は本館3階一番奥の旧相談室です。居心地はともいいいので、気軽に来てください」

「運がよければときどき部長が作ってくるおやつにありつけます。これがおいしいんです」

「打ち合わせにないこと言うなよ。また、何か相談事があるというときも僕たちのところに来てください。円満解決になるよう僕らが尽力します。匿名希望の方はどこにでも置いてある相談ポストに内容を書いて入れてください」

「また、イタズラで入れたような内容に関しては、その方の良心に問題があるとして匿名でも——」

「僕らが探しあてて部室にお呼びして強制的に問題を解決させていただきます。クーリングオフは適応されませんのでご注意ください」
「では。T高校内特設総合問題解決倶楽部でした！」

ちようどいい速さで喋り、2人で華やかに笑ってみせる。僕はともかく森羅は我が高校の2番めのミスターに認定されたやつだ。効果がないわけはなからう（多分）。プラス、僕が付け加えたし。

後でゐつに聞いた。僕らが去った後、新入生たちはしばらく赤い顔でぼうっとしていたらしい。男も、女も。

僕らといえは。

「あんなに打ち合わせ通りにって言ったのに、約束破ったな！」

「でもウケたでしょ。客の増加にもきつとつながるぜ」

「客とか言うなよ、依頼人だろ。まあ、森羅めあてに女子は来るね、絶対」

「アホ言え。お前めあてだろ。ミスターの1番取っというて自分がカッコいいことも分かってねえな。いつも俺に告白してくんのはお前にフラれてそれじゃあ森羅君、って女ばっかりだぞ！」

「僕は森羅みたいに好きでもない女と付き合う趣味はないよ。フリならしてもいいけどさ」

消しゴムが飛んできた。片手でとって投げ返す。幸いにも紅茶はこぼれなかった。

「筆記用具は投げるものじゃありませんよー。小学校で習わなかった？」

「俺は別に好きでもない女と付き合い合ってるわけじゃない！お前みたいに簡単にフレないんだよ。あーっ、俺って本当に優しいわ。というわけでクッキー頂戴」

コンコン

「あ、依頼人かな。どうぞ」

ノブを回して廊下を見れば。依頼人でも見学者でも野次馬でもある人がそこにいた。

「どうも、先輩！綱手ゐつが部活見学に来ました！あ、そこで隠れ

てた人も一緒に連れてきちゃいましたよ。いいですよね」

本当を見ると見えるもの（1）（前書き）

こういう話が嫌いな方もいるかもしれませんが――変えようと努力はしましたが――我慢して読んでいただけるとありがたいです。

下手な文（駄文というんでしょうか？）を読んでいたでいて、本当にありがとうございます。

本当を見ると見えるもの（1）

ゐつが連れてきたのは依頼人だった。同じ2年生のおとなしそうな女の子だ。ぼそぼそとか細かい声で話す依頼人の話にしぼし耳を傾ける。話の途中で泣き出し、しまいには話が支離滅裂になったが、最後に「——お願いします。あの教師をどうにかして！」とはつきり言った。そして、泣き崩れる。

困ったような顔をする森羅、びっくりしておろおろするゐつ。僕は依頼人の背中をなで、低く静かに囁く。

「分かったよ。だから泣かないで、いや泣いてもいい。好きなだけ泣いて……そのほうが楽になれる。泣いて……」

優しさと、穏やかさ。低く、静かな声。ほぼ本能的に身につけた慰めかただ。すこしずつ、依頼人の感情が静まっていくのが分かる。でも、僕の意識の中には微塵の優しさも、穏やかさもない。

——石山聡介。年齢36歳、身長188cm、体重76kg（健康診断時）。町外れのアパートで1人暮らし。現在彼女無。我がT高校体育教官兼、生徒指導部指導員。野球部顧問。以前にセクハラ疑惑有。当時は証拠不十分で処分はなかった——

セクハラならまだしも、といつては悪いが、今回の依頼が本当だったならそれは立派な犯罪だ。処分どころの問題ではない。逮捕、それでなくとも免停は免れないだろう。

依頼人の話から見えるものは。

十分レイプに相当する。

しかも手口から見て常習犯である可能性もある。

僕たちの組織で処理してもいいような内容だ。倶楽部で解決できるかどうか、分らない。

「よくそんな辛いこと僕たちに言ってくれたね。えらい。その勇氣は……」

真正面から依頼人を見つめる。

「僕らが、引き継ごう」

この依頼人は確か寮生活のはずだ。本来相談できるはずの親も近くにはいない。最近では減少したと聞くけれど、まだセカンド・レイプ——事件後、警察の事情聴取や心ない人々の誹謗中傷によって行われる、精神的レイプ——は残っている。それが怖いせいもあって誰にも言えなかったのだろう。同情するわけではない。そんなものはとっくの昔に捨てた。

「今からならまだ間に合うんじゃない？あの先生、呼んだら？」

森羅が僕にそう呼びかける。

「そーするつもりでした。えっと、ケータイケータイ……」

「誰を呼ぶんですか？先輩」

ゐつが依頼人にお茶を勧めながら聞く。

「この手の問題に明るい女の子」

いわゆる先生みたいな人、と説くと依頼人は不安そうな顔でこちらを見た。

「大丈夫。僕が信頼してるいい人だから。……もう来たみたいだけど」

「へ？」

ノックもなしに扉が開く。

「はろろくん。お久しぶり。対価は隼が払ってくれるんだって？」

ショートボブというのか、そんな髪型の女の子が僕らの言う先生だ。

「払うよ。前払いはこっちにきたらやる」

「今回はなにかなあ♪」

のこのこ近づいてきた先生の腕を捕らえ、引き寄せた。

「とりあえず、これで勘弁」

悪戯っぽく囁く。

抗議しようとして半開きになった先生の唇に自分の唇を重ねる。

3人の目の前で。ほんの一瞬抗った後、先生は身体をこちらに預けた。薄く開いていた目をゆっくり閉じる。先生が喉を上下させるの

が分かる。

古びた振り子時計がくぐもった音で時間を知らせた。先生から唇を離す。こぼれた唾液を人差し指で掬い取り、舐め取る。それを、緩慢とした動作で嚥下した。

「前払いになったか？」

3人が口をぽかんと開けている中でにやりと笑い。

「悪くないね、隼ご自慢の紅茶の味がしたし」

「足りないか」

「あとで足りない分をもらうからいい。後のはちゃんと物でちょうだい。中毒になっちゃうから」

声を立てて笑う。

「僕のキスは毒なのか？今までそんなこといわれたことない」

「隼の存在自体が毒よ。自覚してるくせに、意地の悪い子」

いまだに3人は口をぽかんと開けている。

「いつまで口開けてんの。ドライマウスは虫歯悪化の原因」

「お、おまっ！人の目の前で何して」

「ん？キス。悪かった？」

悪びれずに僕はそういうと、爽やかに笑ってみせた。

本当を見ると見えるもの(2)

とりあえず依頼人を帰し、静かになった部室で僕は静かにため息をついた。あつと森羅は黙って立っている。右のこめかみに手をあてる。心拍に合わせて響く頭。

「どう攻めようかな・・・・・・クラッキング？潜入？もしくは」

「お前、よくも俺らの前でその、」

「キスも人を動かすいい手段だよ。僕みたいな体質じゃそっちを使った方がいいんだ」

「先輩、それってどういう」

「この話は今日は終わり！考え込んだら頭が痛くなる」

嘘ではない。本当に頭が痛かった。耳のすぐ横で思い切り鐘を鳴らされたようだった。

「もう、今日は帰ろう」

帰ろう。このままでは僕が・・・・・・

「ただいんです。みなさん」

「・・・・・・ただいま」

結局、帰り道はひとことも喋らずに帰ってきた。あつを先に入らせて玄関にへたり込む。目の前がくにやりと歪む。眩暈めまいだ。――立てない。

「どうした？・・・・・・ははくん、立てないんだな」

靴を勝手に脱がされて、負ぶわされるのがかろうじて分かった。

生薬の匂い。陸だ――

「涼々。隼が潰れた」

そう言いながら陸さんが玄関から現れた。背中に、先輩を背負って。

「えっ、せ、先輩？どうしたんですか」

「熱あるな。部屋まで連れていこー。ちさ姉」

「分かってる。氷枕でしょ。あとは、タオルか」

みんなが動き出す。慌てたようではあるけれども、動きは的確で迅速だ。先輩は、陽に当たらない白い肌を青に変えて浅い呼吸を繰り返している。涼さんが先輩のブレザーを脱がせ、着替えをさせにかかる。あたしは後ろを向いた。陸さんがベルトに手をかけたからだ。

「ゐつちゃん、先にご飯食べてなよ。俺らはこれ終わったら食べるから」

「まだ慣れてないんだしさ。初めてだから仕方ないし」
声は優しかったが、有無を言わせぬ響きが隠れていた。

「は、い……」

ぽつぽつと階段を下り、食卓に座る。

「いただきます」

ひとりの食卓は。まだみんなと数回しか食べていないのに。
寂しかった。

本当を見ると見えるもの。まだそれは、見えないようだった。

本当を見ると見えるもの（2）（後書き）

えゝ、たくさん書きすぎたので分割するのゝ。ひどいよゝ。

あ、おれ、陸。作者さんが書きすぎて、これは皆さんが読みづらくなゝということだ『本当を見ると見えるもの』を分割してしまつたお詫びで出演します。

ギャラなし。ボランティアじゃん。あとで作者さんご自慢のケーキくださいよゝ。

暗いときでも見えるもの

「……いつてきます」

1人の登校。

「あ、あつちゃん。伝言」

「? 誰からですか?」

「あつちゃんの教育係から」

つまり、先輩ということだ。

「えーっと、『僕はいけないから森羅と行け。quintができる範囲で調査して来て』だって」

「え……」

「分かった?」

「はい、涼さん……?」

一瞬眉をひそめると彼は。

「俺は陸だよ。まあ、似てるから間違うよね」
へらと笑った。

「あ、ご、ごめんなさい」

いいよ、と陸は手を振って。

「いってらっしゃい」

心を読まれていたらしい。びっくりしたが、うれしかった。

「そーそー、そのほうがいいって。あつちゃんは笑顔が似合うよー」

「ごめんなさい、この話するのは辛いと思うんですけど」

「いいです……先生のおかげで結構楽になりましたから」

女生徒は笑ってそう言った。昨日の事が嘘のように落ち着いている。隣にはその先生。

「へえ、隼はまた寝込んだの。つい一ヶ月前でしょ、前寝込んだのは」

あつは知らない。どうすることもできずにただ黙って聞き流した。

それを責めることなく先生は先を促す。

「それで……」

「あつちゃんが言っていると日が暮れても終わらないね。俺がやる。君はなんで、あのセンコーにやられたか、理由分かる？」

あたしが言えなかったことを、部屋の隅で聞いていた森羅先輩はさらりと言ったのけた。

「それは」

酷い質問だと思う。酷い。

「ふーん、俺は分かった。君がそんな風になかなか口に出せない性格だと知ったから、あのセンコーが狙ったんだな。気弱な女の子は黙り込むことの方が多いし。どうせ君も最初は黙り込むうとか思ってたんだろう？」

「！そんなこと」

「ないって言える？それは本当？本当を見たいなら、そのことに真正面から向き合わなきゃ。君は、それを怠ってる」

森羅先輩は、女生徒に言葉を畳み掛ける。確かに正論だ。確かに、それは正しい。

でも。

「森羅先輩、言いすぎだと思います」

「あつちゃんは黙ってる」

「黙りません。この人は被害者です。そんな人に酷い言葉ばかり投げかけて、それで森羅先輩は悪いとか思わないんですか？一番辛いのはこの人ですよ？女でもない森羅先輩には分からないんですよけど——」

「分かるから言ってるんだ。あつちゃんこそ、俺のことなんて何も知らないくせにずけずけものを言うな」

黙った。黙るしかない。あたしは森羅先輩のことを知らない。森羅先輩はきつとあたしのことを分かっているのだろう。その差は、小さいようで大きい。どうしようもない。

「で、どうなの？」

「……そう、かもしれない」

「決定。まあ分かっちゃいたけど、気の弱い女の子に重点的に話を聞いてくか」

森羅先輩はふうとため息をついてそう言った。あたしは、何もしてない。

「あのっ、森羅先輩、ごめんなさい」

「なんで？」

「だって、あたし森羅先輩の何にも知らないのに、酷いこと言っちゃったみたいで」

きよとん、と音が聞こえそうなほどの顔。

「ああ、あのことね。別に、俺も悪いこといった」

そう言うのと森羅先輩は息をつき、あつの正面に向き直り。

「俺の母さんさ、レイプされて気イ狂ったんだよね。だから、分かるつもり。しかもそれ、俺の目の前でやられたからさ。『見るな』って隼が俺を気絶させなかったら、俺も狂ってたかもな」

笑っている。ペットボトルのお茶に口を付け、吹かない程度に笑っている。

「母さんの治療もこのごろうまくいってるみたい」

「でも、森羅先輩はどうやって立ち直ったんですか？」

聞いてみた。森羅先輩の表情が、固まった。

手を伸ばした先に見えるもの

「……どーゆーこと？」

無表情だ。本当に分からない、そんな顔だ。

「森羅先輩も、傷つきましたよね。たぶんですけど。だから、どうやって立ち直ったのかな……って」

もしかして、聞いてはいけない質問だっただろうか。あわてて謝ろうとすると、森羅先輩は。

「ふっ、はははっ！俺のことかー。そんなの聞かれたことなかったから、ちよっとびっくりした。大抵のヤツは後悔したような声ですぐ謝るのに、くくっ、そーか、俺のこと」

腹を抱えて大笑いしだした。ひいひい苦しそうに息をしながら、なおも笑い転げる。

「だ、大丈夫ですか！？ヒステリーですか？それとも」

大丈夫と手で示した森羅先輩は、息を整えるとやわらかく笑って遠くを見た。その顔に狂気の表情はない。むしろ懐かしくて嬉しそうな、そんな顔だ。

「そりゃ、俺も落ち込んだよ。犯人は捕まったけど、そいつを殺してやりたいと思うくらい憎んだ。荒れて、守ってくれた隼にもキツイ言葉ばっかかけてさ。『俺の気持ちなんか分からないくせに』とか、『何で俺を気絶させた。あのまま俺も狂った方が良かったのにとか』

でもさ。と森羅先輩。

「あんなにひどいことばっか言ったのに、隼は毎日俺に話しかけてくれたんだ。1回、俺が『お前なんかと出会わなきゃ良かった』なんて言ったときも、そんなときは帰ったけど、次の日にはまた俺に笑いかけて『おはよ』とか言うんだぜ？医者から寝てろって言われても俺に会いに来て、ついには倒れるまで。死にかけたらしい。さすがに親父に怒られた。隼、母さんを治してくれそうな医者も探し

てたみたいで、クリニックの推薦状を十数枚見せられたよ」

両手の指先を合わせる森羅先輩。

「先輩が……」

「そう。んで、謝りに行ったら隼の第一声が『森羅、元気か?』だ。自分が生死の淵さまよったすぐあとに、いえる言葉じゃねえ。それが暗いところにいる俺を、引っ張った。暗い中で、隼だけがはっきり見えた。笑って俺を助けてくれるんだ、いつも」

馬鹿らしいけど。

しばらくの沈黙が流れた。舌を出して沈黙を破る彼。

「なんてな。俺がこの話をしたのは隼には黙っててくれよ?俺がカッコ悪いし」

手のひらも合わせてあたしにお願いと頼み込む。彼の心情は、あたしに分かるほど簡単ではないはずだ。きつとずっと複雑で、本当を言えば泣きたいのかもしれない。でも、目の前の森羅先輩は笑っている。

「分かりました!言いませんよう。あ、帰りに先輩のお見舞いに来ませんか?あたし、まだ先輩のお世話してないんです。森羅先輩と一緒に許してくれるかも」

そういうあたしだって。

「隼、気分どうだ?ほら、ゼリー買ってきた」

「サンキュ……」

「隼ったらさ、薬以外何も食べてないんだよね。どうもありがとう、森羅」

薬は空の胃には逆に悪いのではなかっただろうか?

「え、陸さん、薬剤師……でしたよね?確か薬って」

「化学的なものの場合こそだね。俺の専門は漢方。悪くないとは言えないんだけど、この際薬飲めるなら飲ましかないと」

どこからかスプーンを取り出して、先輩の前の可動式テーブルに置く。ゆっくり先輩が起きるのを介抱して、陸さんは先輩のすぐ隣

に座った。

「さ、食べる」

先輩は慌てずに着物の襟を直し、スプーンで小さくゼリーをすくった。

「あ、これ『明朗堂』の紅茶ゼリーじゃん」

そろそろと口の中にいれる。嬉しそうに笑った。その様子を見て森羅先輩が笑って言った。

「お前、これ好きだろ。食べれるだろうと思ってな」
他愛もない話をしながらすこしづつ食べていく先輩。
半分くらいまできた。

「……」

スプーンが止まった。小さなカップに入っている分など、そう多くはないのに。

「まだ半分残ってるよね、隼。まさか食べられないとか言うなよ」

「食べられないなら残してもいいんだぜ？」

「森羅、甘やかすのは良くない」

小さくまたすくう。でも、口に運ばない。

「先輩？」

「陸、頼む、……」

「だめだ、」

スプーンがぐるりと回った。先輩がテーブルに肘を突く。
森羅先輩が先輩の頬に手を当てた。

「まだ熱いじゃん、無理はだめなんじゃねえの」

「いいよ、森羅。食べるから」

今までの食べ方とは打って変わって、一気に口の中にいれる。よく噛んで、飲み込んだ。

「ご馳走様でした」

「よし、身体拭いておこ。拭いたらまた寝てろよ」

「あ、お手伝い」

「よし、行こーか」

森羅先輩があたしを引っ張って部屋から連れ出した。

「森羅先輩」

「何だ？」

引っ張り出したのは当然だというようにけろりとして聞いてくる。

「男の人って裸を見られたくないんですか？」

「いや、人によると思うけど……あいつは好きな方じゃないと思う。だから連れ出したんだけど」

ちよつと思議だった。まだ数日しか過ごしていないが、そんなことを気にするような人ではないはずだ。

「ま、他人^{ひと}に言えないことも時にはあるさ。……あーっ！やべ、今日予定あったんだ、ごめん、俺帰るわ」

次には消えていた。

思わずつぶやく。

「速……」

臨むからこそ見えるもの

夢だ。夢だ。夢でないはずがない。

「隼、おいで！」

「どうした、隼」

夢なんだ。ならば、醒めなければならぬ夢だ。でも、そこから動けない。

「ほら、こっち」

「隼、置いていくぞ？」

この二人がいるわけない。それは分かつてる。それでも。ここは。――、逃げよう！ここは危ない」

二人の名前を呼んで。手を引こうとすると。

「隼！」

目の前が、真つ赤に染まる。

「隼、……逃げろ——」

「逃げなさい！」

[illegible]

「――あつ！」

自分の手が見えた。強く握りすぎて関節が白く浮き出ている。いつものこと。でも、今回は一つだけ違った。虚空を掴んでいるはずの手。その手に、小さな手が捕まっている。僕の細く筋張った手に、柔らかくて滑らかな手。

「先輩っ、大丈夫ですか！」

ゐつの、心配そうな顔が見えた。

「あ……」

ごめん、と手を離そうとすると。

「ッッ！」

「先輩？」

背中が痛む。

「……大丈夫、なんでもない」

手を引き、姿勢を直す。あつにはまだ知られなくていい。

「先輩、水飲みますか？すごい汗ですよ」

あつが水を注ごうとする手を止め、自分で注ぐ。

「ありがと、……今何時か分かる？」

夜の7時なのは、わかっていた。とりあえず聞いてみただけだ。

「夜の7時くらいです。ご飯持ってきたんですけど。食べますか？」

疑っているわけではない。僕の疑り深い性質が悪い。そんな性質がにくい。でも。

「いい、いらない、明日になったら食べる」

僕はまだ、あつを信じていない。あつは僕を信じているのだろうに。食事に何かを混ぜるようなこと、しないと頭では分かっているのに。

「ありがとな、メガネ、取ってくれる？」

取ってくれたメガネを、かけるわけでもなく脇に置く。もともとかけるつもりではなかったから、それでいいのだが。

紗の布を結びなおす。緩んでいると危ない。

「先輩、聞いていいですか」

「何？」

「その布って」

大体聞かれる。

「僕、目が弱いんだ。光に弱くて、いつもなんかに遮られてないときつい」

ははは、と乾いた声で笑う。

「ご、ごめんなさい、嫌なこと聞きましたか」

「いや、別に？僕も聞きたいんだけど」

あの女生徒が気になる。どうなっただろうか。あの先生だから大丈夫だとは思うが。珍しく素直にそう告げると、少し困った顔で笑っていた。

「森羅先輩がすごいこと言っちゃいましたけど、まあまあですかね。気の弱い女の子相手に——なんでもかんでも」

ぎり

本当に音がした。手を強く握って……

「なんで、手袋はめてるんだ？ 左手に」

偽りの跡に見えるもの

「これは……」

答えにくそうだ。疑いたくはない。だが。

「ゐつ、先に言っておくがな。僕を殺そうとした奴はこれまで何人もいる。この身体を見りゃ分かるとおり」

着物の襟元をがばりと開けて、傷だらけの体を見せる。怪我の痕と、手術の痕が薄く見えた。大量にある。また襟を直す。

「でも、僕を殺せた奴は1人としていない。逆に彼奴等^{あいつら}は『自分』を消された。って、僕が消しちゃったんだけど。ゐつも、僕のことを殺すなら、そこんとこ気を付けろよ」

冷たい笑いを送る。全てを拒絶する。

なにもいらない。なにも知らない。なにもきかない。なにもみない。

「僕寝るから、ゐつ。出てってくれないか？人がいると、眠れないんだ」

「え」

「出てってくれ。今、僕はとても機嫌が悪い」

別に機嫌は悪くない。眠くもない。ただ1人になりたい。

しばらくゐつはそこにとどまっていて、ゆっくり出ていった。僕を気にしているようだった。

ゐつが出て行ってからすぐ僕は頭を働かせた。今僕が敵対している組織、人物。それから恨みを買った奴ら、またはその子。

思わず笑みがこぼれる。数え切れないほどいるではないか。

僕がゐつに「殺せない」と言ったとき、一瞬ゐつは気配を見せた。恐怖。

怖いという感情からは何も取れないが、僕をはめようとしているのは間違いない。殺しにくるか、一生仕事をできなくするか、多分どちらかだろう。どちらにしてもやられるつもりは毛頭ないが。や

られる前にやるのが僕のモットー。かと言ってゐつを締めあげても、ろくな情報は出てこないのだろう。今のところは様子を見るしかない。

布団を頭からかぶる。頭がまたぼうっとしてきた。まだ熱が下がっていないからだ。目をぎゅっつつむる。右手の甲に思い切り爪を立てる。……ダメだ。意識が離れていく。眠くなってきた。

意識が切れる寸前、さすがにきついことをゐつに言ってしまったと、後悔した。

眩しい。目が開いた。すっきりしている。昨日の熱っぽさはほとんどない。起き上がった。すこし目を回したが、だるさは消えた。

「っと」

フロアリングの床に足を付ける。ゆっくり立ち上がると、ふらついた。でも、大丈夫だ。紗の布からメガネに替えて、制服に着替える。僕はブレザーを最後に着る性質だから、そこまでの準備を下まで降りた。

「おはよ」

「！まだ寝てろ、顔色が良くないぞー」

「大丈夫。ゐつは？」

いた。おわんにご飯をよそっている。

「ゐつ」

びくつと揺れる肩。

「ごめん、昨日はひどいこと言った。ちょっと虫の居所が悪かったんだ。ホントに、ごめん」

謝る。本当に申し訳ないと思っている。

後ろを向いたまま、ゐつが言った。

「機嫌が悪かったんですね、もう良いんですか？」

怒っているだろうと思った。

「うん、もういい。気分で当たったりなんかして、ごめん」
くるり、こちらを向いたゐつ。いきなり頭を下げた。

「あたしこそ、ごめんなさいっ！先輩が辛いのに……」
沈黙。

「と、とりあえず、仲直りってことでいいか」

「は、はい」

意外とあっけなかった。

「こんにちはー……！」

「「おう」」

入ってくるなりびっくりしたような顔で固まるゐつ。まあ、びっくりして当然か。

「先輩、女子の制服なんかあてて、何してるんですか」

僕の手には女子の服。どう考えても僕の体型では入らない服である。

「いや、誤解を招くといけないから言っておくが、僕は断じて制服フェチなんかじゃない。おとりでも使わなきゃ決定的証拠が掴めないから、僕が変装しようとしているだけ」

「でも、どう見ても入らないじゃありませんか」

そこで森羅が軽やかに三度舌打ちをする。人差し指を立てて左右に振っていた。キザッぽい格好が似合う奴だよ、全く。

「それが入るんだなー。はじめて見たときは誰だってびっくりするぞ。隼、着てこいよ」

「あい、分かった。大丈夫、変だとは思わない自信があるぞ」

僕は、奥の更衣室に入り、服を着替えた。長髪のウィッグをかぶる。メガネを替えた。

「出来たよ」

入っていったのは間違いなく男の先輩だった。180センチを超えているのであろう身長に、細いが筋肉質の身体。それは見まがうことなく男だと思った。

でも、出てきたのは。

「出来たよ」

160センチくらいの身長に、しなやかな――女の身体。小さな顔に大きな目。綺麗なセミロングの髪をストレートに伸ばし、いつものメタルフレームでない女の子らしいメガネをかけている。

女の『先輩』にしか見えない。

「どう？女にしか見えないでしょ」

女の中でも高めの声。綺麗な水笛の音のようだ。くすくす笑う顔は、女のあたしでもどきっとする。妖艶、という言葉が似合うだろうか？

「どうしたの？あつ、ぼーっとして」

くつくつと笑っていた森羅先輩が答える。

「そりゃあ、隼は男のときも女のときも魅力的な人間だからな。ん？いや、『紫苑』か。いつとくが、紫苑。お前それは『妖艶な』であって『気弱な』とは程遠いぞ」

「そか。じゃあこんな感じで」

今までの虜にする雰囲気が消えた。

儂げだ。伏せがちの目があつに向いたとき、違った意味で心を奪われた。守らなければならないと思う優美さ。

「名前は……紫苑。女で通る名前で良かったわ」

「先輩が……おとりに？」

ふわりと笑う。その表情にも心が動く。欲しい、と思う。心からこの人が欲しい。

「臨まなければ。見えるものも見えなくなるのよ？」

「つまり？」

「得たい物があるのなら、それに立ち向かわなければいけないっていうこと」

先輩は、人差し指を口に当てて。

また妖艶に戻り、悪戯っぽくウインクをした。

霧の中に見えるもの

「あの、先生」

「ん？誰だ？」

「あ、2年の村木紫苑といいます」

先輩が目的に話しかけている。可愛い。普通の女の子など比ではないくらい可愛い。

「……森羅先輩」

「ん？」

「先輩って何であんなにかっこいいし、可愛いんですか？」

口の端を吊り上げて、森羅先輩は笑った。

「そりゃあ、女心ってのが分かってるからな。それに……っと」
不自然に言葉を切った。それを誤魔化すように先輩を見やる。

「紫苑、今日で仕留めるつもりだ。準備するぞ」

紫苑。

先輩の暗号名。

「仕留めるって言うのは？」

「襲われるフリをするってこと。それで現行犯にでもなれば、あとは簡単だからな」

我が先輩ながら。

「なんか、ずるくないですか？だって先輩が誘惑したって言われたら、おしまいじゃ」

「あー、それは大丈夫。今からあいつが誘い込む部屋に隠しカメラを置くだろ？で、生放送」

「？どこで」

「まあまあ、後で分かるって」

「先生。私、そろそろ帰らないと」

「いいから。ちゃんとマネージャーの仕事説明しなきゃ」

「いえ、今日は用事があるんです……」

「少し話そう。どこなら落ち着くかな？」

「え、あ……そ、相談室を……」

「じゃ、そこで」

紫苑は連れて行かれた。半ば強制である。

「よし。村木さんだっけ？まずちゃちゃつとやること説明する。まずは」

手取り足取り教えるフリをして腰やら太ももやらを触ってくる。

動きが無駄にいやらしい。

（こいつ、変装解いたらぶん殴ってやる……絶対だ、絶対）

心の中でそう思っているが、表情に出してしまえば水の泡だ。

「せ、先生っ！やめて……！」

「ほら、固くならないで」

「ちょっ、嫌」

組み伏せられる。そろそろばれるだろう。

そろそろ、バラしてやる時期だ。

声音を変える。か細い女の声から、艶やかな女郎の声に。

「あー、ちゃんと放送できてた？^{エス}S」

スピーカーから、声が流れてきた。女の声だ。

『ええ、ちゃんと』

「村木」

「センセ？分かっていらっしやらないようね？」

『あら、先生ったら。バカなのかしら？』

紫苑——隼と、S——森羅の女声があざ笑う。

そのころ、学校全体では。

「え、あれ石山？」

「女の子がいるぞ」

どの教室にもテレビが付いている。体育館はスクリーン。そこに、石山と紫苑が写っていた。

「貴方って、本当に体使うしか能がない人。これはね、映像になっ

て学校中に流れてるわ。あと……PTA。どうなるかしらねえ？」

クスリ。紫苑は晒^{わら}う。

「偽りの劇。その跡から見つけたのは下らないことだけど。貴方をおとすには十分よね」

耳元で、甘く囁いた。人を翻弄する、その声で。

「ごめん、先生。僕は村木 隼。T高校内特設総合問題解決倶楽部——通称探偵倶楽部の部長です。ご存知でしょう？ 貴方を、この高校を汚す者として、校長ならび警察に報告しました。お分かりですね？」

扉から現れたのは、森羅、みつ、そして。厳しい顔の制裁者だった。

夜の先に見えるもの

「先生、男の僕を抱こうとした罰ということで、ちょっと殴らせてください」

「ちよっ、隼、止めろって！な、」

「森羅は黙ってろ。僕は十分なセクハラを受けた」

「お前が証人なんだから！とりあえず落ち着け！やるっていったのは隼だろ」

「確かに僕はこれ以上、この先もやったことあるが」

僕は最上級の笑顔で指を鳴らした。森羅が逃げる。

「僕の生涯の汚点だ。こんな馬鹿で、能無しの、脳がスポンジみたくカスカスな教師に抱かれるなんて」

ここで、わざとらしい咳払いが聞こえた。せつかくいいシーンなのに。

「村木君、気持ちは分かるが落ち着きたまえ。いつもの君らしくない」

校長だ。さすがにやばいかもしれない。拳を緩め、校長の前に向き直る。

「では、僕たちの仕事はここまでですから。ああ、あと、見ていただけましたよね？写真。実に悪趣味な……」

苦々しげに笑う校長。

「あの女生徒らしき姿と石山先生が写っている写真かね？あれを見せるだけでもPTAには十分だったんだ、わざわざこんな劇をしなくても」

「いいえ。する必要はありません。完全に陥れるのが、依頼ですから」

僕が悪そうに笑えば、石山は顔を真っ赤にして自分を弁護しはじめた。

「そ、その写真っていうのは、合成じゃないのか。今だって、む、

村木が自分から誘ってきたんじゃないか！」

「写真は先生のパソコンから盗ってきたので、間違いありませんね。専門家にでも頼みますか？それに、映像からも分かるとおり、僕は先生を一度も誘ったりなんかしていない。貴方が勝手に僕を——いや、村木紫苑という女生徒を襲ったんだ。ちなみに言っときますけど、僕は男に抱かれる趣味なんかありませんよ」

あざ笑う。

「じゃ、写真を盗ってきた！？ふん、じゃあ証拠能力はないじゃないか」

「今からパソコン見せてください。やましいところがないなら、見せられますよね？なかったら僕、なんでもしますよ」

一瞬、にたりと石山が笑った気がしたが……。

「……おい、隼。見つかんねーぞ。ごみ箱もさらったのに」

「ウソつけ。探し方が下手なんだよ。そんな証拠、消したに決まってるだろ？変われ」

にたにた笑う石山を横目に、パソコンを自分の方に向け、内容なかを漁る。

「ほら、削除の跡がある」

石山の顔から笑みが消えた。

「これを見つけられたら、っと」

ここから先は、学校では少しヤバイ。

「校長、目エつぶっててくださいね」

返事を聞く前に手が動き出す。キーの音。パソコンに写った、この言葉とも思えない言語。あと2分。慣れた作業だ。

フォルダが、現れた。石山の顔色が変わる。フォルダ名は『資料』とそれらしく書いてあるが、中身は分かっている。

「はい、一仕事終わり」

開こうとすると。

ピピッ

「おいおい、パスワードもかけてんのか。たかが資料にご苦労なことで、石山先生？」

たかがパスワードごとき。

「さて、本領発揮と行きますか」

簡単だ。

「えっと、……うわ、ひどいパス。もうちょっと考えてつけばいいのに。校長、目開けていいですよ。見たくなければそれでもいいですけど」

写真を選ぶ。生徒の顔が映っている写真はダメだ。盗撮ものは顔まで撮らないから……バレない、かな。

「……ですね。もう一つ、仕事終わった。これで、言い訳できますか」

石山がうつむく。言い訳など、言えるはずがない。ここで言ったら、相当の馬鹿だ。

「お、おれは！別に……」

相当の馬鹿だったらしい。自分もまだまだだと思う。

「てめえ、この期に及んでまだ弁解するって言うのか？教師の風上にも置けねえ」

森羅が暴言を吐く。いつもなら僕が止めに入るところだが。

僕自身、キレていた。

笑った。数多の人を誘惑してきた笑みで。石山も、幸せそうに笑ったところで。

僕は、使ってしまった。

石山が恐怖の表情を見せる。目を伏せ、何も言わない校長たちに頭を下げる。

「じゃあ、報告書書いておくので。僕帰ります」

森羅とあつの首根っこを引っつかんで、職員室からさっさと逃げだした。僕らが消えた職員室に、重い重い空気がのしかかった。

部室まで逃げ帰ると、先輩は肩で息をして崩れるように座った。

息が荒い。

「先輩？」

「ちょっと黙ってな、ゐっちゃん。隼に近づくのはいいが、目は見るな」

目を、見るな。どういう意味なのかまったく分からない。そもそも先輩は手で目を覆い隠しているのだ。見えようがない。

すると森羅先輩は立ち上がり、お湯を沸かし始めた。

「紅茶淹れるけど。隼、お前、砂糖入れる？それとも、ミルクにしかとか？」

いつものように。すると、か細い声が聞こえる。

「コーヒー……ブラックがいい」

「お前、コーヒー牛乳は好きだけどコーヒー嫌いじゃん」
「いいから」

しょうがないという風に肩をすくめ、森羅先輩は紅茶ではなくコーヒーを淹れだした。静かな部屋に、香ばしいコーヒーの匂いが広がった。優雅な動作でカップにコーヒーを注ぐと、先輩の前に置く森羅先輩。

「はいよ、熱いぞ。ミルクほしかったらあとで自分で入れろよ」
顔を上げた先輩。……目をつぶっていた。見えていないはずのカップを手に取り、後ろを向く。

「――苦いな。頭すっきりする」

「頭すっきりして、胸もすいたか？俺はすっきりしないが」

「僕もだ。いつもはこんなことでイライラしないのに、鬱憤が溜まっていたのかな」

「そうなんじゃ？俺もたまにあるぜ。そんなときはどっかで悪さしてたチンピラども殴りに行って、すっきりするけど」

「僕は森羅みたいに時間かけないんだぞ。殴ってもすっきりしない」

「今さらって自分の方が強いって言ったよな、絶対！」

「そんなことないさ。あゝ、はい、森羅モ強イヨ」

「すっげー棒読み。……もう大丈夫か？」

切れ目のないラリーのような会話が終わる。それと同時に先輩は目を開けた。

身がすくむ。空気が凍ってしまったかのように、動こうとすると痛い。

「まだダメだな。俺は慣れてるけど、あつちゃん固まってる」

先輩は再び目を閉じた。

緊張が解ける。春の空気が戻ってきた。

「あつ……怖かったか」

正直に言えば、そうだ。先輩が時折表す負の感情は、驚くほど暗い。

「べ、別に！そんなことはありません」

「はは、ウソ下手」

にっこり先輩が笑い、そろそろと目を開けた。

冬の冷たい靄が晴れて、春の暖かい風が吹いた気がした。

ドーナツの穴から見えるもの

「説明しなきゃいけないなあ」

「え、あつちゃんに？」

帰り道のこと。坂道を歩きながら唐突に先輩はいった。

「何のことですか？」

あたしが聞くと、森羅先輩が冷ややかな目を先輩に向ける。

「そう怖い顔すんなって、森羅。僕の話。説明しなきゃいけないだろ？」

先輩の目がこちらを向く。すると。

「止まれ」

先輩の声と共に足が止まった。動かない。手も、足も。力を込めて動こうとするのに。ぴくりとも動かないのだ。先輩から目を離せない。開いたままの目は、不思議と乾いた感じがしない。

「きをつけ」

先輩の命令。手足が、勝手に動く。

「礼」

頭が下がる。

「もういいよ」

緊張が解けた。自分の意思で体を動かせる。思わず、深いため息をついた。それを見て森羅先輩が言う。優しい口調。

「自分の意思で体が動かないって辛いよな。俺も経験したことあるけど、結構怖かった」

「というわけ。分かった？あつ」

綺麗な顔を右に傾けて先輩が聞く。というわけ、って……

「どーゆーわけですか」

「あちゃ、さすがに分かんないか。――僕はね、人を操ることが出来るんだ。催眠術の場合、本人が受け入れなければ出来ないけど、僕の場合は違う。自分が『こうしてほしい』と願うことを他人の心

に植えつける。相手に一分いちぶの隙さえあれば、僕はその相手の心をぞくことが出来るんだ。そして、思い通りに動かせる」

自分の考えを、人に植えつける。

「それって……とっても危険なんじゃ」

「そ。たとえば、今僕がゐつに『死ぬ』って言ったら、ゐつは死んだ。自分で自分の首絞めたり、頸動脈切ったり、飛び降りたりしてね。で、『〇〇を殺せ』って言ったら、ゐつはそいつを殺してた。そんなに簡単じゃないけど、出来る」

人の力を超えている。そんなこと出来るのは。

「神様じゃ、ないんだから」

「！僕は人間……だよ。少なくとも、神ではない」

今の間は、いったい何なのだろうか。彼は、人間であるはずだ。そうでなければ、何だというのだ。聞きたいが、知りたいが、同時に知るのが怖い。感情を気取られぬよう精一杯笑顔を作る。

「あたしは運動神経がいいんですよ。自信ありますから」

自分の話にすりかえる。先輩の目を見るのが少し怖い。森羅先輩が普通に先輩を見られるのが不思議で仕方ない。

「俺ら2人でかかったら、どうだ？倒せるかな、隼」

屈託なく笑う先輩たち。

「そうだな……戦場だったら、森羅死亡、僕瀕死で、ゐつ戦闘不能くらいかな」

先輩は笑ってそう言うが、話す内容は普通笑えるものではない。

冗談でいうならまだしも、声はいたって真剣なのだ。

「俺死んでるの！？んでお前が瀕死って。どんだけ強いんだよ、ゐつちゃん……ゐつちゃん？」

「ゐつ、どうした？」

学校の秀才2人組、美男子2人組がそろって私を覗き込む。森羅先輩はいつも通りだ。先輩も、いつも通り、優しい瞳をゐつに向けている。

冷たいときの先輩と、優しいときの先輩。どちらが本当なのか分

からなくなる。

「なんでもないです！先輩、なんで殺し合いを想定するんですかつ、怖いじゃないですか。あたし、あんまり戦うの好きじゃないんです」

「お、おう」

今は、優しいのだ。その優しさを感じるのは……罪ではないはずだ。

「ゐつ、明日買い物行こーぜ。お前、私服少なすぎだよ。服を見繕おう」

「俺も行くー。大丈夫だ、ゐっちゃん。女と付き合えない隼とは違って俺はファッションを理解してるぞ」

不服そうな顔で森羅先輩を見る先輩。

「森羅と違って僕は自分で女にもなるんだ、僕だって分かってる！それに、僕は『付き合えない』んじゃありません、『付き合わない』んです。というわけで、明日行こうか」

「え、でもあたし、お金」

「僕ゐつの教育係兼世話役だから。お金も使ってもらった方が嬉しいし」

お金を使ってほしい？何で？

「お前手術くらいにしか金使わなねーもんな。そのわりに報酬はじやんじゃん入ってくるし。あ、知ってるかゐっちゃん。隼はプログラムとかの著作権、株の取引で稼いでるんだぜ？玉の輿に乗りたきやこいつがいい」

「たまのこし……ですか」

「別に、親の遺産で生活してるようなもんなんだから」
え？

遺産？

誰のって。

「ご両親、え、その」

口がうまく回らない。親の遺産。親が生きてたら、そんなことを言いはしない。

「先輩の、ご両親って、え、な」

「それも言っていないっけ。僕の両親は死んだよ。僕が2才の時に殺された。それからエージェントになって、今月で15周年かな」

「話し出したら何でもばらすなー、お前」

「いたって先輩たちは気楽そうだ。笑って、なんでもないようなことのように話している。」

両親は、いない。殺された。

どこが何でもないことなのだ。

「……先輩は、おかしいですよ」

「へ？」

間の抜けた声で森羅先輩が問うた。先輩は片目を細め、持っていたカバンを肩からかける。

「おかしいです。両親を失って、それで笑ってるなんて。しかも殺されたっていうのに。森羅先輩も、友達の親が殺されてるのに」

ダメだ。これ以上一緒にいたら泣いてしまう。自分は涙もろいのだ。自分が泣いても何にもならないことなど分かっているのに、何故か泣いてしまうのだ。特に、その当事者が強い――泣きもせず、悲観もせずに進んでいる――と。

「ごめんなさい、先帰ってます」

「あつ……！」

「おいおい、どーしたんだよ」

あたしが本気で走れば、誰もついてこれられない。靴をそろえるのもかまわずに部屋まで走った。制服のままベッドに倒れこむ。

どうにか、泣かずにすんだ。

と、思った瞬間。

「いってえ！何すんだよ、ちさ姉！僕が何をしたって」

「そーだよ、ちさ姉。俺たちはただ話してただけだって」

「ウソおっしゃい。それなら何でゐつが、泣いてたのよ」

泣いてる？慌てて頬に手を当てる。濡れていない。やはり、泣いていない。

「何を話してたの」

「僕の能力の話、収入の話、あと……両親が死んでるって話」

「そんだけだ、間違いない」

「あんたたち——！よくそんなこと言ったわ、女の子に。デリカシ——なさすぎ」

あきれた声で言い切る所長。少し言葉を切り。

「ゐつ、聞いている暇があるならこの2人を徹底的に怒んなさい。2人はちゃんとゐつに謝りなさい！」

その後、僕たちは徹底的にちさ姉にしぼられた。ようやく許されたと思ったら今度は能力を使っただのがばれ、さらに僕だけ、涼と陸にいやみをたらたら言われ続け、最終的に

「これから一週間、目を曝^{さら}すな」

「アイマスクの上に包帯するってことで」

「[「刑罰決定」]」

いま、僕は何も見えていない。しかし、どこに何があるかは分かる。部屋を出て、隣のゐつの部屋に行った。

「ゐつ、もう寝た？」

「お、起きてます。ちょっと待ってくださいっ！」

「いや、部屋に入るのもなんだからここで話すけど」

扉の向こうの、あわただしそうな音が消えた。

「ごめんな、僕、何にも考えてなかった。先に説明すんの忘れたんだ。僕は両親を失ったとき、確かに哀しかった。今は哀しくない……って言ったらウソになる。でも、哀しいだけじゃないから笑ってたんだ」

「どういことですか」

「夜の先にはいつも朝がある。誰が死のうと、誰が生まれようと、それは同じだ。僕は、その夜の先の朝を見てるだけ。朝が来て、人

はその前にあつた夜を忘れるか？」

「忘れ、ないと思います」

「そう、忘れない」

沈黙が流れる。……だ、ダメだったか？ フォローできてなかった？

「あーっ、僕ってカッコつけが性に合わないんだな。さっき散々怒られてる姿見せたあとなのに」

「そんなことはありません」

強い否定の声が、扉の向こうからした。

「先輩はカッコいいです。姿もそうですけど、心も、何もかも全部、カッコいいです。はっ！ あたし、何言ってるんだろ！ お、おやすみなさい！ 明日、買い物楽しみにしてます」

ベッドに飛び込む音がする。それ以上に。

僕の心臓の音がする。今までになかったくらいバクバクしている。病気じゃない。でも、頬が熱い。

「なんなんだ。なんなんだ、これ。なんなんだよ」

朝になれば治るだろうか。この火照りも、この動悸も。

「ね、寝よう。僕らしくもない」

どこの甘々な恋愛小説だ。女の子の褒め言葉で舞い上がるなんて言語道断だ――！

ドーナツの穴から見えるもの（後書き）

ういっす。森羅でーす。

長々と書いてしまったことに対するお詫びをしに参りましたー。

……ダメだな、俺のファンがいなくなっちゃ困る。

長々と書いてしまいましたが、読んでいただけて嬉しいです。ありがとうございます！

これからもよろしくお願いします。

次回は俺の秘密が明かされるぜ！

「何言ってるんだ、バカ。作者にプレッシャーをかけるなよ」

「隼、こんくらいがいいんだって」

じゃ、また今度！

仕事の奥に見えるもの

そして。買い物当日。

「せ、先輩、それで行くんですか」

「？何か変か？とった服、間違えたかな」

服の手触りを確認する。間違いない。僕が着ようと思っていた服だ。裏表に着てもいないし、どこも変なところはないはずだが。

「いや、その目。見えないですよね」

ゐつが指で示す気配がある。アイマスクの上に包帯をして、失明した人のような状態になっている僕のことを言っているに違いない。「ああ、大丈夫。気配とか音とかを感じ取って動くから。目隠しされてもいつもと同じように動けるように訓練されてきたんだ」

「へー。そんなことができるんですね！」

素直に感心しているらしい。そんなゐつはというと。

「ゐつ、あなた制服で行くつもりなの？ダメじゃない。ねえ隼、服貸してあげてよ」

「制服だったのか……。ちょっと待ってろ。サイズはSでいいのか？」

「いえ、Mをお願いします。先輩の、服ですか？」

「そーだけど、どっかおかしいか？」

変装用の服を大量に持っているため、貸すことなんてどうとも思わない。あとで何がおかしいのか森羅に聞いたら、「男が女の服持ってるのはおかしいぜ、普通」だそうだ。

「ほら、こんな感じが似合うだろ。着替えてみな。おかしかったらまた違うの持ってくるから」

想像で選んだものだ。うまくいっているといいのだが。

着替えてきたらしく、ちさ姉がため息をついた。

「似合ってるじゃない。とっても可愛い、ゐつ。隼、見られなくて残念ね。見てたら、さすがのあなたでも見とれたでしょうに」

「おーい、そろそろ行こーぜ、っ」
森羅だ。途中で不自然に止まる。

「隼、お前それで服見れんのかよ。あと、その可愛い御嬢さん、誰？」

「せんぱーいっ！はやくはやく！」

「急がなくても服は逃げてかねーって。森羅のことも考えろよ。なあ？」

「そう、思うんなら、荷物、一個ぐらい、持てよ。買って、やったの、お前じゃねえか」

「悪い悪い。半分持つから」

「いや、この、一個でいい、って」

「どんだけ息切れてんだよ。これだからお坊ちゃまは」

息を切らしながら話している森羅から、荷物の半分を（ほぼ強引に）受け取り、僕は笑った。荷物が減って楽になったのか、息を整えた森羅が反論する。

「お坊ちゃま呼ばわりすんなよ。それが嫌で公立通ってんのに」

「いいじゃん、文部科学大臣の孫。今度は総理を狙ってるんだって？」

「そ、もう隠居すりゃいいのに、まだ頑張るみてえ」

僕らがゆったり歩きながらゐつの後を追いかけると、正午を告げる音楽が鳴った。

一直線に、ゐつが戻ってくる。

「ど、どーしたゐっちゃうん」

「ゐつ、そんなスピードで戻ってくると転ぶぞ」

「……」

くううつ きゆるる

「……もしかしてお腹空いた？」

僕がおそるおそる聞いてみると、うなづく気配。僕は、笑ってはいけないと分かっているにも笑ってしまった。ゐつの体内時計は驚く

ほど正確らしい。

「どっかで何か食べるか。つってもお昼時はどこも込むからな」

「今は軽く食べといて、あとでご飯でもいいか？ るつ」

「はい、ありがとうございます！」

行ったのは、大手ドーナツチェーンだ。一番空いていた。

「また食べるってこと考えて頼めよ、るつ。森羅、あとで一口かじらせて」

多分、今森羅が取ったのは丸い球がつながった形のドーナツ。

「お前、あんま食べる気ないだろ。いいけどさ」
横であつが悩んでいる。

「先輩っ、アップルパイとえびグラタンパイ、どっちがいいんでしょう」

「僕はシナモンの香りが嫌いなんだ。つか、どんだけ食べるつもりだ」

「じゃあ、えびグラタンパイにします。よく食べるほうなんで」
会計は僕。適当な飲み物をあわせて頼むと。

「お会計、2260円になります」

今日はドーナツ全品100円セールだったはずなのに。当の本人たちは幸せそうな雰囲気です。ドーナツをかじっている。ま、幸せそうならいいか。

「ほら、どんだけ食べる？ 取ってやるから」

「ん、じゃあ玉二個分で」

渡されたドーナツを口に入れる。もちもちした食感と甘みが好きなのだ。

「ごちそうさまでした」

「へんはい、ほんはい……ん。先輩、ホントに少食ですね」

「あつはマジでよく食べるんだな。いい食べっぷり」

僕は心からびっくりした。あの小さな体のどこに、これだけの食料が入るんだ。そう言えば、ウシ科の動物の中にも、小さいヤツがいたよな。反芻するのが目に見えて分かる……僕は何を考えている

んだ。ゐつが反芻する様子を本気で想像してしまうなんて。ちよっと、試してみるか。

「知ってるか、ゐつ」

「はい？」

「ドーナツとか、穴が開いてるもの。その穴から見える景色って、今よりほんの少し未来なんだそうだ」

「ほ、ホントか！」

身を乗り出して食いつく森羅に苦笑する。

「ゐつが食いつくと思ったのに。何で森羅がそんなに食いつくんだよ」

「そんなのウソでしょう、先輩」

何でも信じてしまうような見かけによらず、ゐつがさめた声で言う。笑った顔で、静かに。

「本当。穴をのぞいて見えるのは、時として未来だ。僕自身が経験したんだから、間違いない」

そうだ、あの時、僕は知っていた。

「夢あんじゃん。俺、そーゆーの好き」

森羅が実際に穴をのぞいて僕にウインクする。

「先輩、次はどこに行くんですか？」

「そうだなあ、とりあえず1回荷物を家に持って帰ろう」

「持って帰ろ。俺これ持ったまま午後も、ってのは無理」

ずっと荷物係をさせられていた森羅が安堵のため息をついた。

一度荷物を置いていき、再び店に向かったとき。

「おい、隼。左斜め前10m先にいるやつら、お前がこてんぱんにしたバカだ」

「人数は大体十人くらいです」

「あのなあ、ここは公衆の面前だから。そう簡単に手を出せない」
気づかれずに通り過ぎようと思っていたのだが、そううまくはいかないらしい。目ざとく見つけられ、近づいてくる。

「森羅、ゐつ、今から言うとおりにやれよ」

あと2mほど。

——ゐつ、あっちにぶつかれ。

軽く肩が触れる程度で、ゐつが奴らにぶつかった。それで充分だ。

「お、かわいー子。オレらと一緒に遊ばない？」

僕らを気にしている。見える感情は。

劣等感。

まあ、当たり前か。

——森羅、行け。

「おいおい、この子は今俺らと遊んでんの。邪魔しないでくれる？」

森羅がゐつの肩を抱く。

「は？彼女、オレらの方が絶対いいって」

「そんな、目が見えてない男はお坊ちゃんに任せて」

男とは僕のことなのだろう。お坊ちゃんは森羅。

——ゐつ、反論。逆上させろ。

「嫌です。先輩という方がずっといいわ。あなたたちみたいな弱虫

よりも、ね」

演技をする気配はない。そのわりにすごく感じが出ている。素で

言ってるのか？

「あん？弱虫い？何言ってるんだ」

——ゐつ、森羅、倒すなよ。されるがままにしとけ。

「ちよっ、やめて！いやっ」

「おい！お前ら、っ」

森羅の腹を殴ろうとする。それは困る。相手の拳を片手で止めて、

僕はにっこり笑った。

「やめようか。トモヤ？」

名前を当てられたのがそれほどびっくりしたのだろうか。手が緩まる。その手を、後ろにひねり上げた。後ろからもう1人近づいてくる。右手でひねり上げたまま左手で突き出された手首を掴み、思い切り回す。1回転して落ちた。また1人。右手に持った男をその

まま突き出す。2人とも倒れこむ。

「君たちは、僕に散々やられたことを忘れたんだな。全く、学習能力が皆無とは、猿と比べるのも猿がかわいそうなほどだ。それとも、僕すら忘れたか？」

森羅とゐつも、動き出した。一斉に襲いかかってきた奴らを投げ飛ばしている。

「はい。ひと仕事終わり。行くぞ、正当防衛が過剰防衛になっちゃう」

2人がいるであろう方を向き、僕は優しく笑った。ゐつと森羅の足音が、こちらに近づくのが分かったら。

ナイフの切っ先に見えるもの

「っと」

「どーしました？」

違う。この気配は、2人分じゃない。紛れるようにもう1人、いや、2人。全部で4人分だ。

「森羅、怪我不いか？」

「おう、だいじょーぶ。お前こそ、顔色悪りいぞ」

正体不明の足が止まる。殺気が伝わる。僕だけに向けられている、はずだ。

「森羅、ちょっと入り口付近で待ち合わせな。東口に。逃げ切ったら電話する」

「あたしもついて」

「ダメだ。森羅を守れ。僕らエージェントに任せられた仕事の一つだ、*quint*」

目隠しでは見えないが、悔しそうな顔をしているに違いない。多分。こういうときに暗号名を使うのはずるいと、分かっていたが、使う方が楽だった。

低く、静かに僕は言う。

「行け」

「隼は逃げなれてるから。心配することない」

森羅先輩は楽しそうにコーラを飲む。今あたし達がいるのはファミレス。ご飯を食べて待とうという話になったのだ。

「でも、先輩、目が見えてないのに」

「見えてないと思うか？」

問う声に肯定すると。

「それじゃ、まだまだだぜ？ るっちゃん。あいつは、そんな程度で倒されるやつじゃない。ハンデつけても30人は普通に倒すぜ」

「え、強いとは思ってましたけど、そこまでなんですか」

「ああ、そういや、あつちゃんは57人だっけ？隼が分析したところによると」

「その微妙な数字、なんですか」

「何かしらのハンデをつけて戦わせたら、何人倒せるかっていう話をしてたんだ。それで、隼が弾き出した数字」

どんな話をしていたんだ。

「隼って元々理系でさ。何でも頭ん中で計算する癖があるんだな。身体動かすときも、いかに無駄な動きを減らし、かつ計算的に見えないかを常に計算してるって言ってた。病気のとき意外はな」

「そういえば先輩って身体弱いですよ。虚弱体質だって」

「俺が出会ったときからずっとそうだったぜ。1ヵ月に1回は絶対寝込んでた。怪我してた。イギリス留学してたときもそうだったんじゃないかねえか？」

「イギリス留学してたんですか、先輩。あ、本部はイギリスにありますしね」

「それ。で、大学まで終わってから帰ってきた。すっげー変わったけどな。今の隼になれるのに、俺ずいぶんかかった」

「え」

つまり、前は先輩はこうではなかったということか。

「前の隼は――」

「あんたたち、一体何？えー、あー！」

リーダーであるらしい人間のところまで跳躍し、耳元で囁いた。

「そっちから来てくれるとは、嬉しいなあ。まだ僕に御執心なの？」
ブラックジャック。

「危ないな。こんな玩具は、殺せる相手に使いなよ」

人気のない路地に誘い込むと、数は15人にまで増え、凶器もどんどん物騒になっていた。倒したのは10人。あと3分の1。

「さーて、仕事だ。君をシメたら、吐いてくれる？君たちの望み」

4人、一気に片付ける。最後のヤツが僕に殴りかかる。よけきれずに右頬に鈍い痛みが広がった。

「さあ、答えてくれる？ 殴られちゃったもんだから、ちょっと僕イラついてるんだ。痛い思いしたくなかったら早く吐きな」

「話します！ 話しますから！」

ありがたいの意味を込め、優しく笑ってやる。

「今日の仕事減ったわ。ありがと。じゃ、答えて？」

「美佳です。貴方が前に振った、女の名前なんですが」

「んー？ 振ってる女なんていっぱいいるからな」

「え、えっと、30代後半の、泣きぼくろがある、3ヶ月前に貴方が振った女です」

「ああ、あのやけに淫乱な女性^{ひと}か。で？ 自棄になって僕らの組織に手を出そうとしたの？」

「は、はい」

そうか。あの女か。僕への逆恨みから組織に手を出すとは、何も考えていなかったらしい。

「いいこと教えてやるよ。あの女から手を引け。明日くらいに崩れるぞ」

あの厚い化粧と共に、と僕は吐き捨て、路地から消えた。

「おい、森羅、あつ。お前らファミレスでどんだけ食ってんだよ」

「おい、隼。その頬、どうしたんだよ」

「え、先輩。殴られたんですか」

3人の台詞がかぶった。

「かえろ。僕疲れた。所長に報告することもあるし。明日は仕事になるし、早く休むことになるから」

「へえ、仕事片付きそう？」

「ああ」

「仕事ですか！」

「quintにも出てもらうよ。これは組織にかかわるから。徹底

的に潰しとかないと」

僕は小さくガッツポーズを作った。あつに何か仕事を与えなければと思っていた、ちょうどその頃にでかい仕事だ。僕は何て運がいい(?) んだろう。

「うわー、隼が黒い」

「わあ、先輩が黒い」

「そこ！聞こえてるぞ！」

仕事は仕事。僕は割り切って仕事が出来る方だ。あつもそうなのかどうか。それを見極めなければいけない。仕事というものの奥へ奥へ進むたびに、こうも気苦労が増えていくのははっきり言って嫌だ。でも、これもなかなか。

「うん、楽しくなりそうだ」

白の先に見えるもの（前書き）

血の描写がちょこつとあるので、おきをつけを。

白の先に見えるもの

真っ暗な視界の中で、僕は黒の着流しを着ていた。少々寒かったので羽織も着る。動きにくさはそう変わらないから、大丈夫だろう。最後に仕事道具を隠す。よし。

「紫苑、もういい？」

「R、^{アール}どっちでもいいからこの目隠し外せよ。仕事に差し支える」

「いいぜー。赦してやるー」

軽い声と共にはらりと落ちた布を取り、自分でアイマスクを取る。

「うっわ、まぶし。紗の布は？」

「ここ。こっち向かないでね、組織が戦闘^{いしご}不能になっちゃ困るから」
ひどいな、とひとりごちながら目を隠す。さっきのアイマスクと違うのは、景色が見られること。目的は隠すためだが。

「quintは」

首を回して探せば、部屋から出てきた。セーラー服だ。だが、今の学校のものではない。前の中学のものなのだろうか。それも今は、関係ないが。

「もう行くんですね。作戦とか、何かあるんですか？」

「紫苑、説明してないのね」

所長の非難するような目を見無視してquintの方を向く。

「ほとんど戦う必要はない。quintは僕の援護。僕が一番体力消耗することになるから、戦えない。でも襲^{アール}ってくるのは僕限定だ。僕の身の回りの警護よろしく。Rたちと所長はいつも通り」

「はい」

「了解」

「分かりました」

「え、どういうことですか」

「行けば分かる。その無駄口閉じろ」

目を見開いて、哀しそうな表情を見せるquint。隼^{じゅん}ならば、

あたふたして取り繕うところだが。

生憎、僕は紫苑だ。

「紫苑の言うことにいちいち反応してたら身が持たないわよ、quint。紫苑は隼と違って紳士じゃないのよ。慇懃無礼って言葉が一番よく似合う男」

二重人格ではないんだけどね、と言う所長。

「行くぞ。僕が持つかどうか、問題はそれだけなんだから」

僕はあくびをかみ殺し、下駄をつっかけた。

目の前の数人の男たち。媒介になってもらおう。

「お前、村木隼か」

「んー？黙ってて、おじさんたち。ついでに動くな」

男たちは、口を開けたまま動けない。隙発見。

「ココロん中のぞいてあげようか。あー、……この系譜か。この一帯に」

“動くな”

「行くぞ、quint。あと30分が限界。そんなに大きい組織じゃないくて楽だが、人数は多い」

さっさと歩き出した。

「そっか、紫苑がその能力で人を動かすんですね。でも、紫苑自身の神経をすり減らすから時間制限タイムリミットがある」

「やっと分かった、遅い。本当に身体能力だけなのかよ……いや、違うのか。頭はいいが、硬いんだな」

「ひどいですね、紫苑ってホントに」

「置いてくぞ」

「守りませんよ」

「僕を守らなくて催眠が解けて一気に襲い掛かれても知らない」
「……」

階段を降りる途中で止まってしまったのであろう男を脇によけ、僕はどんどん先に進む。

「早く来い。今日は機嫌がいいから5秒待ってやる」

扉の前で立ち止まり、僕はそう言った。この先の奴らには催眠が効かなかったらしい。がたがた動く音がする。音をさせずに来た quint に先行させ、僕は、扉をけり破った。

「おはよ、みなさん。これ以上好きにはさせてあげないよ」

人数は23人。倒せない人数ではない。その中に1人、派手な格好の女。

「あ、美佳さん？覚えてる覚えてる。ダーツの上手い、僕の素性を知っちゃった人だ」

「隼くん！来てくれたのね……新しい彼女付き？」

quint を見た途端に顔をゆがませた。そりゃあ、美少女を連れてきているのだから仕方ないとは思うけれど。

「彼女じゃないよ。それに僕は紫苑。僕ら『氷の刃』に触れた罰を下しに来た。というわけで、みんな止まってくれる？」

僕と quint 以外、氷のように固まった。数度僕は咳をした。

「ねえ、美佳さん。僕なんかを、手に入れるためだけに、よく、こんなことしたね」

まだ15分はあるはず、なのに。息がいつも以上に上がっている。「紫苑、どうしたんですか。顔色悪いですよ」

quint が僕を見て心配そうに声をかけてくる。その間にも僕は膝が笑い、がくと落ちた。胸が、苦しい。息が、肺に入らない。目が見えない。体中が、言うことを聞かない。

この部屋にかけた催眠が解ける。美佳が僕に、ピンヒールをカッカツ鳴らして近づいてくる。

「ふふっ、いろいろ調べたのよ？隼くんが私のものにならないって言ったときから。ねえ、空気中に何か混入してあるの、分かるんでしょう？隼くんは生まれつきの薬アレルギーで、通常の医薬品を入れられると拒絶反応を起こす。下手すれば」

死ぬ。

美佳は僕の耳元で囁き、僕のあごを掴んで上げる。否応なしにさ

らされた喉が、ごくりと鳴る。

「紫苑っ！触らないで下さい、紫苑に」

「quint、下手に動く、な」

身体が痙攣する。

催眠が、解ける。

「わあ、隼くんって本当にすごい。さすが、あの血を引いてるだけはあるのね！軽く350人くらいいる全員を催眠にかけるなんて」
口を封じられる。ただでさえ息が出来ないのに、口内を蠢くものに吐き気を覚える。やっと口を離れた。むせる。

「苦しい？死にそう？楽になりたい？なら隼くん、命乞いしてよ、助けてくださいって」

この、DSが。

外から敵が来るのが分かる。このままでは、quintもやられる。

「み、か、さん。お、ねがいです」

声を絞り出す。quintは、あつは。

「その、女の子は、関係ない。――帰して、やって。僕は、美佳さんのものになろう」

「紫苑」

「私のものに、なってくれるの！」

ぴよんぴよん跳びはね、子供のように喜ぶ美佳。スイッチを、切った。笑いがこぼれる。

「^{アール}R、所長、僕もう限界。ちょっと休憩させてくれない？」

美佳が、異変に気づく。

「隼くん、何したの」

「何も？」

息が吸えるようになってきた。だが、もう動けはしないだろう。

「うわー、紫苑。またしばらく寝込んでてよく？」

「紫苑、油断大敵ー。quint、紫苑を守ってくれる」

勢いよく扉が開かれ、入ってきたのは……3人。

来た。

僕はR（涼と陸のこと）と所長にこう頼んでおいた。

『動けない奴を片っ端からやつつけといて』

こうなることは分かっていた。そして。

「あーあ、つまんない。あつ、隼くん殺して」

あつが、美佳の手先であることも。

僕の首に、あつの手がかかる。

迷っている。

隙が、ある。

「quint、自分のしたいようにすればいい。美佳さんのこの、一生自由じゃない、夢も見られない、でも楽な生活をするか。僕らと一緒に、辛いけどつまらなくはない生活を送るか。どちらにも囚われず、自分で生きるか」

僕の言葉は拘束力を持つ。僕がしたいようにすればいいと言えば、quintは何者にも囚われることはなくなる。こういうときのみ、ありがたい能力だと思う。

そんなときに、美佳の邪魔が入った。

「あつ、村木隼の言葉に耳を傾けたら終わりよ。だってそいつは」
止める。言いたいのに、もうその力がない。

「傾城^{けいせい}の血を引き継いでるんだから」

——傾城^{けいせい}。よく遊女のことを指すが、本来は漢書の光武李夫人の『北方有佳人、絶世而独立、一顧傾人城、再顧傾人国』から出た語だ。その色香におぼれて、城や国を傾け滅ぼすほどの美人のことを指す。日本にも歴史の表舞台には出ずとも、いた。中には男の傾城もいて、傾城同士で子を成すこともあったという。

僕は、その傾城の子孫らしい。その言い伝えは小さい頃一度だけ聞かされた。

「村木隼は、傾城なのよ。先代も傾城だった。傾城同士で結婚して、またそれを産んだの」

「黙りなさい、佐々木美佳。quint、あなたは隼を殺せるって

いうの？あんなに殺すのをためらったあなたが」

なるほど、所長も気づいていたらしい。さすがだ。拍手を送ってやりたいところだが、そんなことができる状態ではない。quintに身体の自由を奪われ、首に手をかけられているのだから。話したくても声は掠れていてろくに出ないし。

「こ、殺せますよ、っ！こんな優男1人、なんだっていうんですか」手に力がこもる。しかし、そこまできつくない。まだ、quintの中に迷いがある。

「殺すなら、殺せ。中途半端に絞められてるこっちの身にもなってみろ」

空気が漏れ出したような音しか出なかったが、quintには充分伝わった。手が緩む。

「でも、でも、あたし、お家^{うち}が」

「家は、僕等ん家じゃ嫌か？」

彼女には守るべき人はいないはずだ。前に話を聞いた時、親は自分のことを見てくれなかったと言っていたのを覚えている。

「でも、あたし、裏切った」

先輩たちを。

何も見えないから分からない。それでも分かる。quint——あつが泣いている。しゃくりあげながら、子供のように嗚咽を漏らして。

「な、泣くなよ、困るだろうが。どっちなんだよ、決めろ」

相変わらず僕の声は掠れていて、空気が漏れたような音だったけれども。

やはり、あつには伝わったらしい。

「紫苑ですか？先輩ですか？優しいからきつと先輩ですね」

「紫苑で悪かったな」

「びっくりです」

泣きながら笑っていた。首から手が離れる。

「あたし、『氷の刃』に、いたい」

小さな声で、ゐつは。

「それじゃあ、おいで」

所長が、通る声で。

「「おいでー」」

Rが、のんびり。

「quint、落とし前は自分できっちりつけろよ。僕はもう疲れた……」

「じゃ、quintちゃん、がんばってー」
それから。

乱闘騒ぎはものの5分も立たずに終了し。

その乱闘騒ぎは書いてしまうと残酷な描写有りになってしまうので。

省くことにして。

「終わりましたっ！紫苑」

「ごころー、さま」

僕はへろへろだった。医薬品アレルギー。この弱点さえなければと思うのだが、治しようがないのではしょうがない。なにしろ前例をみないのだ。

視力は回復していた。だから、それも見えた。

ナイフの切っ先がきらりと光り、こちらに飛んでくるのも。

ゐつの身体を思い切り引っ張る。右手でナイフを弾き落とす、つもりが逸れた。

僕自身の、肩をかすった。相当切れ味がよかったらしく、しばらくしてから大量の血があふれ出す。投げたのは、あの女だ。ナイフの飛んだ軌跡に見覚えがある。

「美佳さん、ナイフ投げ上手いじゃないですか。さすが、ダーツ場で出会っただけはある」

「お褒めの言葉ありがとう、隼くん」

「ご褒美あげますよ」

紗の布を外す。

彼女の瞳を、真正面に見る。

「僕らと関わったこと、全部忘れて」

ゆっくり、彼女の目から光がなくなる。一時的なものだが、警察はこれで、気が触れたのだと勘違いするだろう。もともといろいろヤバイものに手を出していたようだし。

「Good night! I wish you will have a nice dream……」

仕事は終わった。緊張が抜ける。疲労が重くのしかかる。我慢していたアレルギーの症状が出始めた。呼吸困難、発熱、他に、何だっけ。

もう、分からない。

何も、分からない。

笑顔の先に見えるもの

先輩が目覚まさないらしい。といっても一日しか経っていないけれど。自分は部屋に軟禁されて、先輩のいる病院に行きたくても行けないんだけど。食事を運びに来てくれた顔も名前も知らない人が教えてくれた。

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

いくらここで謝っても、意味がないとは分かっている。でも、謝らずにはいられない。

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

部屋の扉が開いた。30代には見えない、綺麗な女性。

「あつ、あなたの処分を決定するから、来なさい」

所長。

「Do you know where she is? (彼女は、何処に?)」

「Here」

所長につれ出され、入ったのは先輩の部屋。そこには数人の男と、陸さん、涼さん、そして。

「所長、どうしてここに先輩がいるんですか」

「ボスの命令ですもの。仕方ないわ」
まだ目を固く閉じたままの先輩。その脇に座っているのは。

「Hi! あつと直接会うのは初めてだね。オレのこと、知ってる?」

知らないわけがない。

『氷の刃』二代目のボス。リル・ブロウ。年齢20歳。

「ボス直々のご登場ですか？」

「まあね。オレ、隼のこと好きだから……いや、同性愛者じゃないから。そんな引きつった顔見せないでよ。うっそ、智佐子も！誤解するな、気に入ってるって意味だ」

ぱっと見た感じは普通の外国人だ。少しチャラ過ぎる感じもするが。

「オレのことチャラ過ぎって思ったろ。そんなことないぜ？少なくとも森羅よりはましだから」

「……！」

読まれた。

「じゃ、裁判といこうか。弁護士はるつ1人だけどね」

「まず答えてもらおうかな。君が隼を狙った理由」

「あたしのこと、知ってて先輩のところに送り込んだんですか」

「質問を質問で返すのは良くない。でも、答えてあげる。知ってたよ。隼も知ってたさ。君は読みやすい子だからさ、初対面ときから見抜いてただろうよ。それでも信じようとしてた隼の努力には、帽子が脱げるね」

何故脱帽とかわないのか気になったが、そこはイギリス人だからという根拠のない理由で片付けることにした。

「先輩を狙ったのは、あの女に育てられた恩義があったからです」

「そう。で、君はどうしたいのかな。これから」

「ここにいたいです」

「相当の罰を受けることになる」

「構いません」

本当にそう思っているのだ。どんな罰を受けても構わない。構わないから、ここにいたい。育児放棄ネグレクトを受けていたあたしにとっては、ここが初めての『家族』だから。

「よし。んん？じゃあオレ、罰を決めなきゃいけないのか。めんどくさっ」

なんだ、この軽い男は。

「え、いいんですか。ここにいても
思わず聞いてしまうほどに。」

「いいでしょ。それ相応の罰を受けるんなら」

「は……」

気が抜ける。世界にまたがる組織『氷の刃』は、もっと厳しいところだと思っていたのに。

「じゃあ。減俸半年、見習い資格の剥奪。もう一つ下の研修生からはじめよっか」

所長が眉をひそめる。

「ボス、それはさすがに厳しすぎるんじゃない」

「構いません」

ここにいられるなら、なんだってする。

そう思ったとき。

「僕にも責任はある。僕を罰すればいい。その代わりゐつを見習いのままにしてやれ、Ja^{ジェイ}y。ゐつを遠まわしに抜けさせようってそうはいかない」

クローゼットの中から、声がした。

先輩の声だ。

でも、先輩はベッドの上にいる。

「……もしかして、このベッドの上に寝てるのって」

ぱちり、目を開けて苦もなく起き上がってくる。顔は間違いなく先輩だ、が、体つきが違う。

「こいつがボス？ 言っとくけど、俺よりあんたのほうが絶対チャライから。えー、リル？ ジェイ？ どっち？」

森羅先輩。

ボスが目を見張る。

クローゼットが開いた。

扉にもたれかかるようにして立っているのは。

「先輩、大丈夫なんですか。そんなところにいて」

「あつ、Jayの言葉を信じすぎたら終わりだぞ。研修生送りⅡ地獄送りとも言われるほど。というか、何かと理不尽なんだ。誰一人として残れた奴なんかいない。墓場送りにされたくはないだろう?」

「オレはL^{リッ}yrだ、Jayじゃない」

「本名はJayなんだから、いいじゃん」

「良くないし、何病人がそんなとこにいるんだよ!横になつとけ、命令だ。Right now! (いますぐに)」

ボスが取り乱している。

「じゃあ、研修生送りは止^やめろ。代わりに、僕の特別資格を剥奪して構わないから」

特別資格のことは知っている。優秀なエージェントに与えられる資格だ。どんな内容かは、知らないが。

先輩が、紗の布を外した。ボスに笑いかける。ボスの背中から首に腕を回し、耳元で囁く。

「ね?研修生送りは、止^やめてくれない?」

まるで男を堕とす淫らな遊女のように。まさに傾城のごとく。

溜息をついて、堕ちたのは。

「やばいやばい、危うく乗せられるところだった。でも――分かった。罰は、あつと隼2人とも減俸半年!ったく、オレって本当に隼に甘いな」

「Thank you so much」

綺麗な発音で、艶やかに先輩が言った。

「じゃあ、これからまたよろしくな、あつ」

「いいんですか、先輩、減俸って」

「別に。1回に入ってくる金額が多すぎると思ったところだ。ちようどいいよ」

「てか、先輩大丈夫なんですか、身体」

「あと数日安静にしてろって言われたくらいだから、大丈夫だろ」

「隼、布団の中に戻ろくか」

「うわ、来た」

先輩が、捕まる前にと部屋に戻る。

これまでと変わらず、これからこの家があたしの家になった。

「あ、いい忘れてた。ゐっ」

先輩が、2階の吹き抜けから顔を出す。

「なんですか？」

何か、用事だろうか。

予想は外れた。

あたしが昔願った一言。

真っ白な世界の象徴だと思っていた、一言。

「おかえり」

それは綺麗な赤色（前書き）

えっと、村木隼です。今回からは新しい事件——それとも話？——に移ります。まだまだ未熟な僕たちですが、精一杯動けるように、また、作者が動かせるように努力していくので、これからも読んでいただけるとありがたいです。

では、どうぞ。

それは綺麗な赤色

「ゐっちゃん、テストどうだった？結果、返ってきたでしょ」

「……」

「ゐっ！。何むくれてるんだよ」

正式にT高校内特設総合問題解決倶楽部——通称探偵倶楽部に入部したあたしは、部活初日から落ち込んでいた。そこに森羅先輩の無情な一言。

「先輩たちは、どうだったんですか」

「質問を質問で返すか、悪いクセだな。はい、ゐっ。強制されたくなかったら答えなさい」

先輩が黒い。がくがくと思ひ切り頷いた。

「国語は？」

「な、75点」

森羅先輩は頷いている。先輩は、固まっている。

「え、英語は？」

「69点」

「……数学は」

「……え、っとお」

駄目だ。言えない。

テスト用紙をそのまま見せた。

大きく、真っ赤な字で、点数が書いてある。

『40』

森羅先輩も、固まった。

「あ、赤点ギリ……」

「ゐっ、これはさすがに、ちさ姉が」

全体的に、とても重苦しい雰囲気。

「せ、先輩たちは！どうだったんですか」

さっき答えてもらえなかった質問を繰り返す。

「俺は順に、90、100、93だな。あ、まだ隼の聞いてなかった」

「僕？僕は……あつ、ごめん」

「何で謝るんですか」

先輩は本当に申し訳なさそうな顔をしている。何だ、先輩もそう良くないのか、と思えば。

「僕は、全部100点」

「……………はい？」

全部、100点？何を言っているんだ、この人は。冗談だと思った。

「だから、全部、100点。間違いゼロ」

冗談じゃなかった。森羅先輩はさほど特別なことでもないかのように話を続ける。

「またか、お前、何の問題なら間違えるわけ」

「そうだな……女性問題？」

しばらくまじめに考えたあとにやりと笑って先輩がいった言葉に、森羅先輩が大笑いした。

「ククッ、そーかもな、ハハハッ！女性、問題」

「森羅、笑いすぎ」

そういう先輩も、森羅先輩を見て笑っている。

2人を見ていたら、なんだかこっちまで可笑しくなってきた。3人でげらげら笑い続けていた。

「ただいま」

「ただいまですっ！」

家に帰ると……ちさ姉さんがにこやかにお茶を飲んでいた。その笑みが怖いと思うのは、気のせいだろうか？

「ちさ姉、お風呂開いてる？今日はちよつと早めに休みたいから、入りたいんだけど」

先輩はその雰囲気を知ってか知らずか、片手でネクタイを緩めながらいつも通り中に入っていく。そんな先輩に、ちさ姉さんから。

「お風呂は沸いてるわ。テスト、どうだった？」
き、来た。

「え？いつも通り」
ちさ姉さんの作り笑いが消える。心配そうな表情になった。

「どうしたの、早めに休むだなんて。具合悪いなら言いなさいよ？」

「大丈夫。ちょっと、んーと、身体が動かしにくいだけ。だから、いつもの出しといて」

「……そう。ならいいけど、辛かったら言いなさいね」

「分かってるって」

苦笑いを浮かべながら、ぽんとあたしの肩に手を置く先輩。

「気をつけろ、悪い点数^{ヤッ}から見せてけ。僕は、ちさ姉に怒られたくないし、身体痛いからいけないけど、頑張れ」

低く囁かれるのは別に構わないが……そんな。

「じゃあ、お風呂入ってくる」

「あつは？テスト、どうだったの？」

このあとあたしは、小一時間こっぴどく叱られた。

「あ、あつちゃん。隼ったら一つ薬忘れてったから、持ってって」

食後のことである。頼まれた薬と水差しを載せたお盆を手に、あたしは先輩の部屋へ向かった。

コンコン

「先輩、薬忘れてますよって、陸さんが」
返事がない。

「先輩？もう休んじやいましたか？」

すると、電子音がして部屋のドアが勝手に開いた。中は真っ暗だ。ぽつりと明かりが灯った。サイドテーブルのランプだ。先輩の顔がかるうじて分かる。眠そうだ。どうやら休んでいるところを起こしてしまったようだった。

「何……？ごめん、今薬効いてて、ぼんやりしてるんだ」

部屋に入り、先輩にもう一度言う。

「薬を一つ忘れているそうです。これ飲んでください」

ああそうと危なっかしげに上半身を起こす先輩。薬を飲み、また布団の中に戻ろうとする。

「あっ！」

「先輩!？」

いきなり背中を弓なりに反らし、先輩は苦痛の表情を浮かべた。みんなを呼んでこようとする、服の端を掴まれてしまう。

「だい、じょうぶ。何とも、ないから、いつもの、ことだから、みんなは呼ばなくていいよ。……ごめん、ちょっと疲れた。おやすみ」
掴まれていた服が離されるのが分かる。先輩はゆっくり息を整え、目を閉じた。

「おやすみなさい」

あたしは小さくそう言って、部屋から出て行った。

また、拒絶だ。

何も必要ない、というような雰囲気。先輩と人との間に、造られた壁。

敵の間にいたときはそれも当然だと思っていた。しかし今、仲間となったというのにこの拒絶感とは。

少し、ほんの少しだけ、胸が軋んだ。

信用されていないのだろうか。……先輩を殺そうとしたのは事実なのだからそれも当然なんだけど。でも。そんなにあたしは信用できないだろうか。いつになったら信用してもらえんだろうか。どうしたら信用してもらえんだろうか。そんなことを考えているからいけないのだろうか。

「あつ? 何考え込んでるの」

「あ……」

お盆を戻し、部屋に戻ろうと思ったときだ。ちさ姉さんが問いかけてきた。先輩は、ちさ姉さんには全幅の信頼を置いているように見える。涼さん、陸さん、森羅先輩にも。逆に言うと、その人たち

にしか。

「え、っと——先輩のこと、なんですけど」

「隼のこと、か。座りなさい、長くなりそう」
言われるままにソファに座る。

「で、隼が？」

「何だか、ホントに心を開いてくれないっていうか、信用してくれてないような感じがするんです」

数秒、ちさ姉さんはびっくりした顔をして。

哀しそうに、笑った。

「それは、仕方ないわね。あれでも前よりは人を信頼するようになったんだから」

それは静かな白色

前よりは。……もしかして。森羅先輩も言っていた、あの時なのか。

「イギリス留学する前は、ってことですか」

小さく、彼女はうなづく。

「そう。それまではエージェントと森羅以外の、全ての人間を拒絶してた。というか、拒絶されてたの。あることがあって、人を惑わす能力を使ってしまったって、幼稚園のみんな、それを信じた親馬鹿たちが『化け物』って……」

ちさ姉さんは言葉の途中で沈黙した。

子供は純粹だ。純粹で、無垢で、残酷だ。一度何かを信じ込むと、それが絶対であると思ってしまう。『化け物』とはじめに言ったのは、たった一人かもしれない。でも、それを聞いた子供たちが信じ込んだら。それが絶対であると思ってしまうたら。

本当に子供というものは、可愛くて、恐ろしい。

「それ、で」

「そして――」

ちさ姉さんが、言葉をつむごうと口を開ける。

「そして？」

穏やかな低音。滑らかなテノール。人をいさめる響きをたたえた、甘い声。人を惑わせ、狂わせる。

「そして、どうしたの？ いけないなあ、僕に黙って、他ならぬ僕のことを話そうなんて。トイレに起きてなきや、うっかり聞き逃すところだった」

先輩。

全身に鳥肌が立った。一気に周りの空気が冷えた気がする。

階段の中ほどにいた先輩は、手すりにつかまってゆっくり降りてきた。

魔王、降臨。そんな想像が頭に浮かぶ。

「あら、私は所長よ。同時に隼の育て親みたいなものじゃない。せっかく仲良くしてくれる子に相談されて、教えない訳があつて？」
普通に答えているちさ姉さん。だが。微かに目が泳いでいる。手が震えている。

ちさ姉さんも、怖いのだ。

所長であるちさ姉さんすら恐怖を感じるなんて。

「でも、それは僕のことだ。勝手に口外しちゃいけないよね。話す時がきたら僕から話すから、ちさ姉はお口をチャックしておけばいいだけ」

左中指で、ちさ姉さんの唇を、すつとなぜる先輩。

「夜更かしは肌が荒れる一因だよ。ちさ姉ももう若くないんだし、そろそろ気をつけなきゃ」

「まだ33よ。お肌の曲がりかどはもう少し先でしょ？そのうちに夜更かしを楽しんでおかないと」

「ははっ、それもそうだね。……そうだな。僕さ、あつに氷の刃の基礎を全部教えてないんだよね。教えてあげてくれない？お話したいんでしょ？」

そして先輩は、ふわっとあくびをした。右手で口元を隠す。

「ごめん、やっぱ眠い。あつ、聞きたいことがあつたら僕に直接訊きなさい。というわけで、おやすみ」

先輩は、部屋に消えていった。

それから、長い沈黙があつて。

ちさ姉さんが、細く息を吐いた。肩の力を抜く。

「あの用心深さも時には困るわ……。どうしてああも秘密主義になつちやつたのかしら」

「先輩、あんなに怖くなるんですね……」

ちさ姉さんが、頭を振る。

「もっと怖くなるわよ。背中をぱっくり開けられて、脊髄を撫でられるような、ううん、もっとね。生きたまま解剖されてるのと等しく怖い。さすが、ボスに気に入られただけはある」

今度は質問をした。あたしは一つ、どうしても気になったことがある。

「ちさ姉さ——所長も、怖かったんですね。日本支部の代表まで動けなくなるほど、ってことは。もしかして先輩って、先輩自身が言ってるような平のエージェントとは違うんじゃないですか？」

あたしに精一杯できる、先輩の網をすり抜ける質問だった。我らが組織である氷の刃のことについてなら、教えてくれるのだ。なら、それに関係することを織り交ぜれば。

「正解。あの子は並みのエージェントじゃない。認めてるから素直に言えるけど、紫苑は私より階級ランクが高いの。組織こしじゃあ階級の高さにあわせて仕事とか給金が違うんだけど、階級が高ければ高いほど、要注意人物になる」

分かる。その能力をひとたび悪事などに使えば、どうなってしまうか分かったものじゃない。

「紫苑はあの能力と併せて、頭脳明晰、運動神経抜群ときたものだから、本当は最高階級トップランクにいてもおかしくないのよ。ただ、虚弱体質と医薬品アレルギーだったのを考慮され、階級をさげてもらえた。実際、そのせいでよく仕事できないときとかあるし」

「そう、なんですか」

「氷の刃には特別資格っていうのがあるのは知ってるわよね。この家に住んでるエージェントは全員取ってる資格なんだけど、これはいろんなことが認められる。そんなに変わるわけじゃない、給金はそのままだし、依頼があったら受けるのは当たり前だわ。ただ、事情がある場合は仕事を断れて、断っても階級は下げられることがないのが、主な内容かな。あと、多少——言っちゃ悪いけど、いけないことともどうにかなる。紫苑とか、ハッキングしてるけど大丈夫でしょ。紫苑ならばれないようにするんでしょうけどね。それ

に……警察から煙たがられる。でも、情報はちゃんとくれるってくらいかしら」

あれ？　そういえばちさ姉さんって。

「所長、警察に、勤めてませんでしたっけ？」

「そうだけど」

けろっとした顔で答える彼女。不思議だ、とても。

「続き話すわね。紫苑はその特別資格を余すところなく使ってるわ。身体の具合が悪いときは、仕事を断るし。さっきも言ったように不正アクセスはするし。警察から、顔は見せないけど情報をもらってるし。私だって、表の仕事が同じになったときには断ってる。職場の人と顔をあわせたらすすがにまずいのよ。涼と陸だって、涼は医療関係を断る。そして——涼は、よく分からないけど総合的な医者らしいのよね——手術があったらそれを優先させる。陸は、自白剤とかよく使ってる」

「そうなんですネ。……でも、知りたいことは聞けずじまい、なんですよね——」

あたしが知りたいのは組織のことではないのだ。先輩のことなのだ。先輩は何故あも頑^{かたく}なに自分を隠そうとするのか、それが知りたいだけなのだ。

先輩がどんな人なのかつかめない。この家の人たちは全員掴みづらいけど、特に。

「知りたいのに」

知りたいのに。

掴めないからこそ、掴みたいのに。

先輩は水に浮かぶ月のように、得ようと思って掬えば消えてしまう。そしてまた、水を湛^たえた器の中に、何事もなかったかのようにいるのだ。

「知りたい、だけなのに」

あたしはまた、誰に聞かせるわけでもなく、呟いた。

それは濁った黒色

「このitは何を指してるか分かるかー。じゃあ、数寄屋橋」

「仮主語のitで、toから後の文を指してまーす」

「正解。じゃあ村木、次の文、訳して」

「『彼女は望みを叶えるためなら、どんなこともしませんでした』」

「……うまい訳だ。もう時間なので、ここで終わり！次からは普通に授業するから、ちゃんと教科書もって来るんだぞ」

「先生もねー」

女子が茶化す。そこでチャイムが鳴った。今から昼休みだ。

「腹減ったな、飯食おうぜ。あ、今日って確か隼が家事当番だったろ！おかずちょうだい」

そう言いながらいそいそと僕のお弁当を勝手に出してくる森羅。

「全く、わかってて言うなよ。今日の朝から知ってたくせに」

僕はいつも、自分が家事当番の日には森羅の分もお弁当を作っている。森羅はいつも購買で何か買って食べていた。朝からお手伝いさんの仕事を増やすようなことをしたくないのだ。しかし、母親などが作ってくれたお弁当というのが羨ましいらしい。それを見ると少しすねたようになる。だから、代わりに僕が作ってくる。お弁当を食べているときの森羅の嬉しそうな顔ときたら、まるでおもちゃを買ってもらった子供のようで。しょうがない、また作ってきてやるかと思ってしまうのだ。

「お弁当の味はいかがでしょうか？この底なし胃袋が」

「おいしい！特にこの、レンコンのはさみ揚げみたいなやつ」

「ああ、これな。フライパンで作れるぞ」

話している間も、森羅の箸は止まらない。いい食べっぷりだ。見ているこっちがお腹いっぱいになりそうなほど。

「そんなに気に入ったんなら、僕のもやるよ」

そう言って、僕のお弁当箱に入っていたレンコンのはさみ揚げもどきを森羅にやろうとする、と。

「ダメ。隼、その弁当くらいは食べる。食べないからいつまでたっても身体が弱いんだ」

形のいい目でにらまれる。

「分かったよ、食べるから。そうだ、パウンドケーキ作ってきたんだ。クラスのみんなに配るから、森羅女の子に配ってきて」

森羅の分はあとで、部室でなと囁けば、がぜんやる気を出してご飯を食べだす。食い物につられるやつが僕の周りに多いと思うのだが、気のせいだろうか？

「はい、いつてきて」

僕は男子に。一人一人に「これからよろしく」と言いながら配る。アレルギーがあるような人には違ったお菓子も作ってきた。

「これ、村木が作ったのか！？ すごいな」

「わ、村木サンキュ」

別にお礼を言われる筋合いではないのだが、言葉もありがたく受け取る。よく休むとさぼりと思われる場合もあるのを危惧して、まず第一印象を良くしているだけなのだ。そんな自分の魂胆を、誰よりも理解している自分自身が嫌いで仕方がない。自分は真っ黒なのだと、改めて思い知る自分が。

「配った。って、隼？ 顔色悪いぞ」

僕のことを心配したのだろう、森羅が僕の背中を軽く叩く。この学校で全てを言えるのは森羅だけだ。人を信頼しないこと。僕が自分で得た教訓だが、森羅は小さな頃からずっと一緒だった。万が一にでも、森羅が僕を裏切ることはない。

「大丈夫。何ともない。ちょっと考えてただけ」

「何を？」

「んー。あつと森羅がいるから、ケーキをまるまる型ごと持ってきたんだけど、はたしてどう分配するかについて」

「ウソつけ、そんなことお前が考えるか。どうせまた自己嫌悪とか

してたんだろ」

僕は低く口笛を吹いてぱらぱら拍手を返した。本当に、勘の鋭いやツ。

すると森羅は呆れたような顔で小さく溜息をつく。きつと「またお前は」とか思っているんだろう。

「5時間目って体育だよな。着替えよ」

話をすりかえる。180度違う方向に。でなければ、僕と森羅の放つ冷たい気で、教室中が暗いムードに陥るかもしれないから。

「そうだな、早めに行こ」

森羅が、ニヒルに笑ってそう言った。

「そういえば、森羅」

「な……に！」

「あつから僕の事聞かれなかったか？」

「お前、の、こと？別に、聞かれてない」

「じゃあ、もし聞かれたら答えないで。お得意の話術を使って全力でその話題から遠ざけろ」

「は、あ？意味、わかんね……。っーか！何で、お前、息が上がるねえんだよ！」

「日頃の訓練の成果？または生来の運動神経のよさ。森羅にあわせ走ってるから、全力じゃないし」

「全力、出せば」

「仕方ないだろ？このところ、つつぱってて。こんなことで全力出して、また開くなんて僕はごめんだからな」

「あっそ……」

「はい、1着だな、2人とも。数寄屋橋、息あがってるけど運動不足か？」

「隼が、おかしいんですよ……5km走ったのにほとんど息切れてないっていうのが」

隣で森羅がぜいぜい荒い息を吐くのを見ながら、持ってきたタオ

ルで汗を拭き、森羅の分も渡す。森羅は座り込んで体育館の壁にもたれた。

「お前さ、病気的时候はこうやって、荒い息はいて辛そうにしてるのに、運動してるときは違うわけ」

「虚弱体質を治すべく運動してたのに、運動能力だけが高まって虚弱体質が治らなかったから。ホント、自分の身体が一番不思議」
体を折って小さく笑う。すると、音が聞こえた気がした。

ピシ

「イッ……!!」

「隼？」

痛みは一瞬。でも、耐え難い痛み。

森羅が先生を呼ぼうと腰を上げた。手を掴んで引き止める。

「――先生は呼ばなくていい、森羅。ちょっと、痛んだだけだから。もう痛くないし、大丈夫」

「大丈夫そうには見えねえけどな」

「今日は検査の日だから、ついでに診てもらうつもりだったし」
これは本当だ。

「……そ。なら、いいけど。お前に何かあったら、俺は当分ちさ姉からひどい扱いを受けるんだ、それはイヤだぜ」

「はいはい」

「『はい』は1回だろ」

「はい」

「はきはき言えよ」

「はいっ」

わざと女声で。語尾にハートを付けた口調で言ってみれば。

「お前、男としてのプライドはないわけ？フツの女子でも、今どきそんなこと言わない」

おいおい、引くなよ。

「冗談だって、本気にすんな」

そうして僕は、森羅に言ったとおり、部活を休んでかかりつけの

病院に向かった。

……あんな目にあうなんて思ってもみなかったけど。

それは汚れた水色

「ただいま」

「おかえりなさいですっ！……先輩？」

「あー、ひどい目にあった」

午後9時。月がもう高い位置に昇ってしまったところ。やっと僕は家に帰ることができた。

ブレザーを脱ぎ、ネクタイを緩める。

「じつはさ——」

学校が終わり、病院に向かい、診察を受けた。結構早く終わったので、本屋にでも寄っていこうと思い、商店街に足向けると。

小さな人だかりができていた。

「おかあさん！どこ行っただのお！！」

真ん中で泣き叫んでいる小さな女の子がいた。かわいいピンクの服をぼろぼろにして、ツインテールがほだけかけている。

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになった顔。ふらふらと母親を探す女の子に、人々は少しでも手助けができたらと彼女の周りに集まるが、彼女は怖がってますます泣き叫ぶ。

「どこ、行っただの！」

見て見ぬ振りをして通り過ぎ、られない。人だかりをすり抜け、女の子に視線を合わせると、僕は笑顔で優しく声を出した。

「泣かないで。きみの、なまえは？」

女の子がきよとした顔で泣きやむ。なぜ自分が泣きやんだのか、分からないのだろう。

「なまえ、教えて？」

「きょうこ。ふじのきょうこ」

慌てて口を押さえる女の子——きょうこちゃん。どこかで聞いた名前だ。

「きょうこちゃんか。きみのおかあさんは、どんな服をきてる？」

「……あかい、ふく。顔も、手も、足もまっかなの」

「えっ」

手足が赤い服というのは、まだあるだろう。だが、顔も赤いとは、一体。

しかし、今はそんなことより、母親を探してあげなければ。

「そっか。……きょうこちゃん、髪結びなおそうか。お母さんに会ったとき、お母さん心配しちゃうよ？ 転んだみたいだけど、痛いところはない？」

「ううん、どこも痛くない」

髪を結いなおしてやり、服についたゴミも払ってやる。

（あれ）

払ったときにめくれたえりの裏。そこに小さく書いてある文字。

「——きょうこちゃん。お母さんの場所が分かったよ」

彼女の顔が、ぱっと晴れた。

「お兄ちゃん、分かるの？ お母さん、どこにいるの？」

「じゃあ、行こっか」

おそらくそこに、母親はいないのだろうけど。

周りの人々に事情を説明し、僕はきょうこちゃんを連れてある場所に行った。

「……すいませーん」

「はい！ 何でしょうか、今大変なことがあって、あまりお構いできないんですけど」

「きょうこちゃんを連れてきました。この子、ですよね」

商店街の近くにある、児童養護施設。えりの裏にはその名前。

僕の前に姿をあらわした女性は、きょうこちゃんの姿を見ると安堵のため息をついた。

「ありがとうございます！ もう、きょうこちゃん。どこにでも行っちゃあだめじゃない」

このこは、児童養護施設に預けられているのだ。

ふじのきょうこ

藤野杏子。藤野あやめの一人娘で、母子家庭だった。1週間前に、藤野あやめは自宅で殺害された。包丁でめった刺しだったらしい。その現場に、娘はいたのだ。

彼女が見た最後の『お母さん』は、血で真っ赤にぬれた藤野あやめだったのだろう。しかし、彼女はそれを認識するにはあまりにも幼く、状況を把握できなかったのだ。だから、母親が真っ赤な服を着ていたと勘違いした。

「母親が死んだってことを知らずに、知り合いの家に預けられてると思い込んでる。そんな杏子ちゃんは幸せなのか、不幸せなのか。考えちゃってなー」

杏子ちゃんを説得するには時間がかかった。半自己催眠をかけており、帰ってくるのだと強く思っているのだから。

最後に僕が帰るとき、杏子ちゃんは手を振ってこう言った。

『お兄ちゃん、ありがとう！またあったら、お母さんに会わせてあげる』

子供の強い思い込みは、僕には消せない。無理やり、と言えなきゃいけないわけではないが、杏子ちゃんのような事情の場合、どうしたらいいのか判断しかねる。

「……って、すまん。あつは」

あつに、親の話はするべきでなかったかもしれない。後悔する。本当に、後悔先に立たずとはよく言ったものである。

「小さい子は、知らないほうが幸せなんじゃないでしょうか。先輩は、どう思っただんですか？」

考え込んでいる。あつは、僕が思っていたよりもずいぶん強い人間だったらしい。

「僕は——よく分からない」

「先輩が、分からないことなんてあるんですか？」

「いや、僕の場合死んだって知らされてるようなものだったからな。それに、自分で言うのもなんだけど僕って小さい頃から結構頭切れたから、周りの大人の反応で分かったんだ。だから、遺産目当ての

親戚たちに引き取られるものかと思って、この氷の刃に入った。要するに、僕は小さい子の感覚が分からないんだな」

小さいころから陰で「さめた子」と呼ばれ続けてきた。みんなで飼っていたウサギが死んだときも、ただ遠くから静かに見ているだけだった。大会に負けたときみんなが悔し涙を流す中、僕だけは何事もなかったかのように普通だった。悲しいことがあってもそう。いじめのような行為を受けてもそう。

「あ……………」

ゐつが黙った。言葉を選んでいるようだ。別に、そんなの、必要ない。

その場を取り繕うための言葉なんて。

「僕、もう寝る。お風呂、あいてるな。じゃ」

これが逃げだということは分かっている。逃げてしまう自分がどんなに弱いのかも分かっている。

わかってるから。

だからせめて。

ひとりで生きられる強さを。

それは汚れた水色（後書き）

なんか、もう、ごめんなさい……。

こんなに暗いキャラじゃないんですよ？ 隼は。

所長として言わせていただきます。

作者さん！ しっかり仕事なさい！

あ、私、これだけ言いたかっただけなんです。
ではまた。次回会える……かな？

それは暗い桃色

また、拒絶。

誰も要らないというような。

たった一人でこの世界を生きていこうとするような。

そんな、拒絶。

「ゐつ？どうしたの、ぼーっとして」

ちさ姉さん。

「隼が心配するよ、私の部屋においで」

そうだろうか？先輩はあたしのことを心配してくれるんだろうか？いつも優しいのは、先輩の得意な演技なのではないだろうか？本当は、こんなあたしを軽蔑しているのではないだろうか？

「ゐつ、来なさい」

「……はい」

ちさ姉さんが、ほぼ強引にあたしを部屋に連れて行く。その部屋は彼女の性格に合わずがらんとしていて、どこか先輩の部屋を思い出させた。

「先に怒っておくわ。隼のことで」

「……」

「あの子を恐怖の目で見ることは、いかなる理由があっても私が許さない。もうひとつ。あの子が自分から心を開くことはない。このままじゃあなた、隼に飲み込まれるわよ」

「飲み、こまれる？」

「飲み込まれたら、もうゐつはあの子には信用されないからね。飲み込まれる前に、受け入れなさい」

意味が、分からない。

「どういう……」

「ごめんね。これ以上は私じゃ言えない。言っちゃいけないの。ごめん——」

『言っちゃいけない——』

それって、どういうことなんだろう。

どうして言っちゃいけないの？

「なんで、なんでっ」

聞きたくもない。拒絶なんて。

「なん、で。なんで——」
なんで。

「ゐっー？おい、もう朝だぞー」

ゐつが起きてこない。

「ゐっー」

「……先に学校行っててください」

「は？なんで」

「いいですから、行ってください」

本人が言っているものは仕方ないのだが。理由は分からないが。
きっと、僕が悪い。

「いつてきます」

森羅を呼びに行く。

ピンポーン

「すいません、森羅を呼びに来ました」

『今出るっ！』

森羅があわてた様子で出てきた。

ゐつが来る前の、いつもどおりだった風景。

「あれ、ゐっちゃんは？」

「分からない。たぶん、僕と一緒にいたくないんだろ」

「何だそれ。訳わかんね。お前、何もしてねえだろ」

「……したよ。きっと」

きっと僕は、何かしてしまったに違いない。

学校に行く途中だというのに、テンションの下がることといった

らない。

「バカか。バカだな。バカなんだな、お前は。頭いいくせに、ホント大バカだな」

「1つの台詞に4つもバカ入れやがって。森羅のほうがバカなんじゃ」

「いや、バカだよ。きっと、ってなんだ、それ。分かってないのに自分のせいだっていうの、バカと一緒にだ」

何もいえない。確かに、そうかもしれない。

「何でもかんでも、悪いことがあれば自分のせい。悪癖にもほどがある。どうにかしろよ、お前」

どうにかしろ。

僕は何も答えずに、黙って森羅の先を歩いた。

それは大きな緑色

「村木くん」

「何？矢部さん」

放課後、目の前の女の子に呼び出しをくらった。誰もいない、たった2人だけの密室。面倒くさい展開だ。

「えっとね、わたし、村木くんのが、ずっと好きなの……っ。っ、付き合ってくださいませんか！」

今どき、こんな女の子も珍しい。20世紀末の遺物か。夕方、^ひ気のない教室に呼び出して、直接相手に告白。まあ、誰にもアドレ^{とけ}ス教えてないから、僕に告白してくる子はほとんどそんなものだが。なるべくなら、彼女を傷つけずに断りたい。

森羅やちさ姉たちは、そんな僕を甘いというかもしれないが。

「あのね、矢部さ——」

「ごめんね、いきなり言われても戸惑うよね。返事は今すぐじゃなくっていいよ。だから……考えておいて」

僕の言葉をさえぎり彼女は早口でそう言うと、風のようなスピードで走っていった。もしかしたらあつよりも速いかもしれない。

とりあえず、帰ろう。

生徒玄関に足を向ける。靴を履き替え、校門を出ようとしたら。

「君、村木紫苑って知ってる？」

低い男の声。聞いたことが——

あ、る。

「え？知ってはいますけど、見たことはありませんよ？」

矢部さんの、声？

「そうか。じゃあこの学校にすごくカッコいい生徒はいないかな？私は芸能プロダクションの者だね。村木紫苑という人はこの世にな

いほど綺麗な人だと聞いたから来たんだけど」

嘘だ。そいつは芸能プロダクションの人間じゃない。

「ああ、それなら」

そいつに、何も教えるな。

「矢部さん」

「!どうしたの」

「ハンカチ落としてったよ。はい」

「あ、ありがとう。あ、おじさん、この人カッコいいでしょう!」

「そうだね。君、ちょっとお話できないかな」

僕の情報を喋られたら、終わりだ。せっかく築き上げた平穏な生活も、人との関係も。

「え? はい、いいですよ」

こいつについていくしかない。僕にとっては、それが最善の選択だ。

近くの喫茶店に連れ込まれた。

「はじめまして、えっと、お名前は?」

男が笑顔で僕に聞く。白々しい。

「ヤマノユウキです。あなたは?」

同じクラスになったばかりの女子の名前を使う。

「私は〇〇プロダクションの水川。そんなに緊張しなくても大丈夫だよ」

「やあ、ひさしぶり。mortalis puer (死にぞこないの子供)」

いきなり、水川と名乗ったそいつは声を潜めていった。にこやかな笑顔は、そのまま。

やはり。

「……よく僕のことなんか覚えてましたね。水川、さん」

平静を装う。運ばれてきたグラスに口をつけ、軽く唇をなめてか

ら彼が話し出した言語——彼の話し方はドイツ訛りがあったが、流暢なラテン語だ——で話した。

「いやあ、君みたいな子はちゃんと覚えているものだよ。人間を、しかも子供だった君を殺し損ねたなんて、私の半生で最大の汚点だから。ねえ？村木紫苑くん」

殺気。殺すのに慣れた目だ。この目を、僕は知っている。

「いいんですか？僕の前に現れちゃって。その名前を知ってるってことは、僕がどの組織にいるのか分かってるんでしょう」

この目を、僕は見たのだ。

「氷の刃かい？あの組織は君の先代がくたばってから弱体の一途をたどっているじゃないか。そんなところより、私たちのところにおいでよ。昔のことは水に流して、さ」

15年前に。

「誰が、行くと思ってんだ。おちよくるのもいい加減にしろよ。今ごろ現れたとはどういう料簡だ。^{りょうけん}ふざけやがって」

「まあまあ。声を荒げないで。不審がられるよ？いつも冷静であるはずの、君らしくない」

「は……」

調子が狂う。彼が僕自身のトラウマになっていることは間違いないし、彼に対して多少なりとも恐怖を感じているのも分かる。しかし、それだけではこんなに焦らないはずだ。こんな、よく分からない感情にはならないはずだ。

なんだ、この感情は。

悟られぬよう、ただ押し黙る。僕の行動をどう受け取ったのか、彼はまた話し出した。

「私だって、君みたいな汚点を傍に置きたくはないさ。しかし、君にはそれ以上の利点がある。親から受け継いだ、傾城の血。それを使えば私たちも危険を冒して人間を殺さなくても済むしね。ああ、私がほしいんじゃないよ。今の雇い主が、君をほしがってる」

「……」

「ま、すぐにとは言わないさ。返事はまた今度聞く。よく考えな。その異常に賢い頭で。ちなみに、もし万が一断ったら、私が今度こそ君を殺すことになるから」

「殺すとかどうか、高校生にする話じゃありませんね。いいですよ、また今度。水川さんというところ胸が悪くなってくる。お勘定は僕でしますから、出てってください。言っておきますが、ここは僕らの縄張りですよ」

領収書を奪い取り、片手でひらひらと手を振る。その気になれば相手を殺せるのは、僕のほうだ。

「――じゃ、コーヒーごちそうさま」

「隼、すごい顔してるわよ。せっかくの美人が台無し」

「美人なんていわれてもうれしくない」

「先輩、なにかあったんですか？すつごく嫌そうな顔してる」

「別に、なんでもない」

「じゅーん、何でしけた面してるの。珍しくあほに見える」

「阿呆で結構」

あの男が言ったことがぐるぐる頭を回っている。いらいらする。身体がふらふらする。って、なんだ。僕は韻を踏みたかったわけじゃない。

「……頭痛い……寝よ」

忘れない。忘れる。忘れる。そう大脳新皮質に命じる。よくある自己催眠だ。何故か自分自身には傾城の力が効かないから、言い聞かせるしかない。

「……人の人生めちゃくちゃにしてくせに」

微かに声が漏れる。本当に小さな声だったのに、ほとんど何もないがらんだ部の部屋に、よく響いた。

それは荒れた茶色

昨日はなんとかいつもどおりに接することができた。と言っても、学校休んだけど。

先輩との接し方が分からない。つい先日までは普通に接することができたのに。今では『普通』にしていることすらできない。

こんなに悩むと、最終的にこれは夢なのではないかと思ってしまう。悪夢。あたしを迎え入れてくれた人が、あたしを拒絶していくという、最悪の。しかし、どれだけ頬をつねっても痛いだけで、夢から覚めることはない。当然だ。悪夢が現実なのだから。

仕方ない。悪夢でもいいから、先輩に『普通』に接したい。

ふと、疑問が浮かぶ。所長が言っていた『飲み込まれる前に、受け入れなさい』。どういう意味なんだろう？

ひどい咳が聞こえてくる。考え事をしすぎた。あたしは急いで水差しに冷たい水を入れ、リビングに向かった。

「お水持ってきましたっ」

「ああ、サンキュ。そこおいといてくれる」

身体が弱いんだとは思っていた。あまり長い間外に出ることはなかったし、みんなも無理をさせないようにと気にかけていた。しかし……

「ほら、隼。水飲め、みず。……まいったな、咳止め飲むか」

ここまでは。先ほどから咳が止まらない。森羅先輩が優しく背中をさすり、薬を含ませる。

「あつちゃん、背中さすっといてくれるか。俺、ちょっと隼の部屋に行ってくるから」

「はい」

優しく、優しく、落ち着いてくれることを願って背をさする。ひどい汗だ。脇においてあったタオルで拭う。先輩と目が合った。紗の布に隠されたそれは熱のせいでぼんやりしているようだ。

先輩が、何かつぶやくように口を動かした。

「先輩？」

ダメだ、やはり分からない。森羅先輩に聞こう。

「森羅せんば」

「……な」

「え？」

「そ……ちに、いく………な」

そっちに、いくな。

「ど、いうことですか」

「夢を見てるんだろ」

いきなり後ろから聞こえてくる声。条件反射で肘を叩き込む。が、外れた。

「うわっ！ 落ち着け、落ち着けよめっちゃん。俺だって」

よく聞けば、聞きなれてきた声。森羅先輩だった。腰が引けているのはあたしが肘を叩き込もうとしたからだろうか。どうどうと馬を落ち着かせるように扱われたのでむっとすれば、いつものような軽い笑顔で手を合わせ「ごめん」と謝ってくる。

「すごい殺気だな、ぞくぞくした。それで表情が笑顔だったら、ほんとに隼だな」

すらりと伸びた腕を見せられる。鳥肌が立っていた。

「気迫でいったら隼が圧倒的に勝ってるけど。あいつのは鳥肌すらたたないもんな。逃げなきゃ、必ず殺されるって感じ。でも気分がらくともう捕まって、アキレス腱切られて逃げられなくなってる恐怖を倍増させるからと目を抉り取られて——あー。自分で言うって怖くなってきた」

聞いてて怖かった。

森羅先輩が先輩を揺り起こそうとする。

「隼ー、起きたまま夢見んな。目を開けたまんま寝てるって、受験直前の徹夜してる学生か」

ずいぶんつまらないギャグだ。

「先輩っ、起きてください」

あたしも起こそうと近づく。

先輩はゆっくりと瞬き、あたしを視界の中に入れて。
目の色を、恐怖に染めた。

「こないで……くるな、嫌だ、いや、っ——」

まるでむずがる子供のように『いや』と繰り返す。
落ち着かせようと手を伸ばす。

「何が——」

嫌なんですか、とは聞けなかった。

紗の布を剥ぎ取る。

真正面から先輩を見る、見られる。

「来るな」

小さな悲鳴をあげたかのように胸が軋む。

ああ、また拒絶か。

それに従うことしかできない。

「隼、ちゃんと見ろ。ちゃんと見て。あの子は誰だ。綱手あつじゃないのか。お前が仲間だって言ったあつちゃんじゃないのか」

森羅先輩が必死になって先輩を起こそうとする。起きられるならあたしも起きたい。こんな悪夢から。

「——っく、う、っ」

誰が泣いてるんだろう。先輩？ いや、目が霞んではいるけれど見える。目が覚めたようにびっくりした顔であたしを見てる。じゃあ、森羅先輩……でもない。同じように、あたしを見る。

「あつ……？ どうした。ゲホ、ゴホッ……泣くなよ、困るだろ。おい、ケホッ、どうしたんだって」

先輩は心底心配そうな顔であたしの涙を拭う。その顔が、あたしには泣きそうに見えた。

自分が何をしていたか、何を話したか先輩は覚えていないようだ。先輩の陰で、森羅先輩は唇を噛んでいた。まるで、泣きそうな表情で。

ねえ、本当に泣いてたのは、だれ？

それは深い紺色

葉が効いたのか、眠ってしまった先輩の横で、森羅先輩は小さくため息をついた。

「俺が言ってもせんないことだけどさ、隼はホントに今のこと覚えてないと思う。だから、代わりに謝る、ごめんな」

「森羅先輩は何も悪くないじゃないですか。先輩も悪くないです。」

……何が悪いとか、きつとないんです」

そうだ。悪いと決め付けられるものが分からない。

「いつもはこんなことないのに——昨日なんかあったのか？」

問いかけではない。純粹な疑問。そういえば、先輩はずいぶん緊張した面持ちで帰ってきた、気がする。そのことを、森羅先輩に話す。

「……隼が緊張してたなんて、そんなこと」

ぶつぶつと考え出す。ときどき「いや、ちがう」とか言っているのは考えに没頭しているからだろう。

「あつちゃん、そもそも隼が緊張する相手なんてほとんどいないんだ。あいつが緊張するのは、めちゃくちゃやばい敵か、昔相当酷い目に合わされたやつくらい……」

いるわけねえしなあ、と髪をぐしゃぐしゃかき回して舌打ち。

「本人に聞くっきゃねーけど、秘密主義だしなあ」

眠っている先輩の髪を優しく撫でて、彼は。

また一つ、ため息をついた。

「あつー。ちょっと手エ貸してくれない？タオルも持ってきて」

「はい？」

「いいのかよ、見せることになるぞ」

「別に。隠すほどのものでもないだろ。もしかして、着替えのときあつを遠ざけてたのってその理由？」

部屋に戻った先輩から呼ばれた。いつもながら森羅先輩に締め出されていたのだが、今日はいともたやすく扉が開いた。

それでも少し入るのにためらわれて、ゆっくり扉を開ける。

「……………え」

リアクションが遅れてしまったのは言うまでもない。

先輩の背中には。

「ぱっと見直線だろ」

右肩から左の腰に向かって、一本の線が伸びていた。手術痕ではない。痣でもない。鋭利な刃物で切られた痕だ。しかもだいぶ古い。

「これ、一体、」

「切り傷」

「それは分かりますけど」

「そうだな、かつこよく言えば15年前に生き延びた代償？」

「は」

「知りたそうにしてるから教えてやる。森羅にも怒られたし。これは、僕が15年前、両親を亡くしたときに傷つけられた痕」

触ってみるか？と問われ、おそろおそろ触ってみた。15年前に付けられたものにしては生々しい。完治したすぐあとのように、他の部分とは馴染まずにあった。おかしい。2歳のときに付けられたものなら、こんな風に背中全体にあるはずがない。

「不思議に思ってるだろ、何で背中全体に傷があるんだって」

「はい……あつ」

「いい。本当のことだ。この傷、何度も開いたり閉じたりしててな、それに加えて、前に1回この傷をなぞられたんだ。ナイフで」

「ナイフ」

「そのことはまたあとで話す。今は両親の時のことだけな。そのあとにも話があるから」

そして先輩は話し出した。まるで他人事のように。彼が体験したことを。

それは甘い紅色（前書き）

えっと、残酷な描写あります。僕が書いてきた中でも結構残酷だし、狂ってる？ので、お気をつけください。

直接的には描写をしていませんが、一応言っておきます。

それは甘い紅色

——15年前。

村木隼は2歳。普通なら何も覚えていない年頃だが、当時から彼には記憶があった。それも鮮明な。

「行くよ、隼」

「……うん」

両親に呼ばれて隼は彼らに駆け寄った。彼の姿に見合った礼服に、合わない帽子を目深にかぶっている。その奥にある瞳は、しっかりと紗の布で隠されていた。

「どうした？ 元気がないな」

「……今日のお仕事、抜けられないの？」

「ごめんな。僕たちが抜けたら仕事が成り立たないんだ」

隼は予感を感じていた。

「今日のお仕事は、ダメだよ」

「どうして？」

「だって、何かあるもん。お父さんとお母さんに、危険なことが起こる」

「仕事だから。大丈夫、何も起こらないと思うよ。長年エージェントをやってる父さんの勘だ」

彼は最近までずっと寝込んでいて、2人は遊んでもやれなかった。のでむくれているのかと思っただけ、彼の母親——名前を沙織さおりという——が隼の頭を撫でながらあやすように言った。

「何かあったらすぐに言うのよ。ごめんね、お母さんたちの仕事につき合わせて」

「いいよ。……だってお仕事でしょ」

いくら現在が氷の刃のエージェントだからと言っても、子供のころは彼も普通の幼児だった。傾城であること、身体が弱いこと、ずば抜けて頭が良いことを除けば。

「さて、一仕事するか」

隼を抱きかかえ、彼の父親——名前を一也^{かずや}という——は優しい顔でそういった。

「隼、ほら、ドーナツ。お母さんには内緒だぞ。沙織はお前が3歳になるまで、砂糖を使ったお菓子を食べさせない方針みたいだから」
「うん」

隼の小さな手に、普通の大きさのドーナツが乗る。幼い子供だ。その穴を覗きたくなる。そと、彼は穴を目の高さまで持っていた。

「！」

そのとき一瞬見えた光景は何だっただろうか。

「あ、一也さん！ダメじゃない、まだ隼にドーナツは早いです」

「おやまあ、見つかったな」

彼の手から、ドーナツが取られた。

「ねえ……」

「なに？」

笑顔で聞いてくれる両親に、彼は、何も言えなかった。穴から覗いた向こう側には。

——この会場が血に染まり、倒れ伏す人の中に両親がいた、などと。

「あなた、隼が」

「隼？」

一也は周りに注意を配りながら隼に目を向けた。母親に抱かれた隼はうとうとしている。眠いのだろうか。それも当然だろう。もう夜も遅く、子連れの客はほとんど帰っていた。しかしそれ以上に。

「……熱い」

頬が真っ赤になっている。うとうとしているように思ったが、そうではないかもしれない。

「熱があるのか。困ったな、仕事はまだ終わらないし、ひとりが抜けてというわけにもいかない」

2人が守るよう命令された要人はまだ帰る様子を見せない。逆に悪酔いしたのかひどく感情的になっている。そんなときほど何かあることを経験で知っていた。

「しばらく隼には我慢してもらうしかないな……」

2人の意識が、ほんの一瞬だけ隼に向いた。

その一瞬で何があったろう？

そう、ほんの一瞬だったのだ。

つんざくような轟音と、むせかえるほどの火薬と、煙と、そして、生臭い錆びた鉄のような血の臭い。その奥には、甘美で官能的で、こわくてき蠱惑的な――死の香りがしていた。

「――隼、沙織、2人とも大丈夫か」

一也は2人が無事であることを確認し、隼が火薬に反応して咳の発作が起きないように、彼の口にハンカチを当てた。そして。

「……あなた？」

ふ、と。

まるで一也の魂を風がさらっていったかのように。

「うそ、こんなときに、冗談やめて」

隼の父親、村木一也は亡くなった。その背中には、何十もの銃創が穿うがたれていた。

「……あれ、まだ生きてる人いますよ、●●」

さっと沙織は隼と共に身を隠す。本当は夫の元にいたかったに違いない。しかし、彼女は自分と、他ならぬ息子の命を優先させた。

「生きるの、生きなきゃいけないの」

彼女はただ、それだけを口にしていた。

それでも。

2人は、見つかった。

「みーつけた。鬼ごっこは終わりですよ、『赤月』」

赤月――それは彼女の暗号名。コードネーム

「『蒼月』はもう死んでましたね。パートナーを失ってさぞや悲しいことでしょう。あ、そちらがあなたの息子さん？『災厄の子』、生まれてこられるはずのなかった子供。異様なほどの知性と才能。『天才』というより『怪物』じみてますね」

と、追跡者は手袋をした手――華の刺繍がしてある――で隼をやすやすと捕まえ。

「『怪物』はどう殺せばいいんですっけ？まあいいや。とりあえずなぶり殺しにしておけば」

すぐに、焼けるような痛みが隼を襲った。右肩から、左の腰に向かって、一直線に。母親の悲鳴が聞こえる。隼は叫ぶこともできずにただ浅い呼吸を繰り返した。自分がされたことの、理解ができない。

「おや、この程度では叫びもしませんか。やはりあれですかねえ。楽に逝かせてやるべきなんでしょうか。まあ、まだ子供ですしね。仕方ありません。次で終わらせてあげます」

追跡者は大きく振りかぶって、背中を傷付けたナイフで。

「……さすがの傾城も、息子の危機とあっては自分の能力を使う前に身を使いますか。せいぜい命が尽きるまで守ってあげてくださいね」

自らの身をもって隼を守った、沙織の体を、何度も、何度も。

「目隠し、外していいわ、だから、」

「立ち止まらずに、いきなさい」

そう言って彼女は。

隼の目隠しをするりと解いて。

一也と同じところへ行った。

「ねー、子供、生きてる？」

「ええ、生きてます。しぶとく、ね」

逃げなければ。

逃げなければ、生きられない。

母親の骸から這い出す。

灼熱に燃える体を引きずって逃げる。

後ろから追跡者が追ってくる。

立ち止まり、振り向く。

追跡者の瞳をしかと見据える。

恐怖が身体中を駆け巡る。

哀しみが心を痛めつける。

痛む体を固定する。

今までとは一転して、深く深呼吸する。

追跡者の中に、隙を見つけ出す。

そして、命令を”植えつける”。

たった今死んだ、2人から教わったことを、今、実践する。

下手をすれば、自分の命はない。

手を硬く握りしめる。

努めて冷静に、命令を下す。

「『来るな』」

追跡者の足が、ぴたりと止まる。

相手が動揺する。

隙が増える。

「『そのまま動くな。万が一動いたら、』」

身体から力が抜ける。

失血性の貧血。

そのままくずおれる。

「あれ、死んじゃった？」

「……」

自分に余裕がなくなれば、命令を下すこともできない。ただ隼は繰り返した。

（来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る）

な来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る
な来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る
な来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る
な来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る
な来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来るな来る
（それこそ、狂うほどに）

それこそ、狂うほどに。

「死んだんでしょう。催眠まがいも解けてる。まあ、もし生きていたとしてもろくに生きられはしませんし」

そうして、追跡者は去っていった。

「それからどれだけたったかな、ちさ姉がおかしいと思って様子を見に行ったら、会場は血の海。死体の山。赤月と蒼月——村木隼の母親と父親もその一部になってた。隼——僕だけが、瀕死の状態でそこから発見されて、生き残ったんだ」

今になって思い出した。あの事件の、あの追跡者の名は。

『あれ、まだ生きてる人いますよ、彼岸^{ひがん}』

僕に伸ばされた手の、手袋には、曼珠沙華^{まんじゅしゃげ}、彼岸花が刺繍されていた。ヒガンバナ科多年草。全草にリコリンなどのアルカロイドを含み、有毒である花。別名は、『死人花』。

「あの死神には、お似合いの花、か」

それは低い黄色（前書き）

わ、わわわわ！ すいません……一ヶ月近く更新してませんね……。
ごめんなさいいっ！ 私生活が忙しくて、って、これは言い訳ですよ
ね。
これからはきっちりします！

それは低い黄色

「quintに頼みがある」

「……は、はい」

「殺し屋の『彼岸』を探しだしてくれ。早急に」

「え」

「できるだろ、つい最近までその世界にどっぷり浸かってたんだから。いや、今もだけど、つうか、今のほうが深く浸かってるか。まあ、調べてきてくれ。僕はしばらくここから出られない」

「でも」

「なんだ」

「……『彼岸』の名前は知ってます。今まで殺し損ねたことがないと言われるほどの殺しの専門家です。でも、彼岸に不用意に接触した人間は、必ず死ぬとも言われています」

今聞きたいのはそんなことじゃない。

「お前がいやなら僕が調べる」

「せん……紫苑？」

ベッドの脇に置いてあるパソコンを引っつかむ。起ち上げて裏サイトに行く。——ない。ただの噂ばかりだ。

大きな舌打ちをしてベッドから降りる。クローゼットからスーツを取り出した。

「紫苑、どこ行くつもりだ。お前まだ治って」

「黙れ」

「黙るか。紫苑。お前の話はまだ終わっちゃいない」

森羅を見る。僕の目から、逸らすことなく見つめてくる。

深遠な色をたたえた美しい湖のようだ。そう思った。彼の心はとても広い。隙はあるが、まず簡単には見つからない。それに比べれば、僕の心はどれだけ狭く、どれだけ汚いことだろう。まるでヘドロがたまっただぶ川だ。

「話？」

「言うことがあるって言ってたじゃねえか。それに、自分で外に出られないとか言っておきながら外に出ようとしてるし」

「僕の揚げ足を取ろうっていうのか」

「いつもは言葉に十分気をつけてるお前が、そんだけ焦ってることを指摘してやったまでの話さ」

僕は細くため息をつき、スーツを放り出してベッドの縁に腰掛けた。

「――森羅の言うことも一理ある。話しちやおうか。その『彼岸』
があ的事件の当事者。昨日、僕にいきなり接触^{コンタクト}してきた。今あいつが雇われている組織が僕を欲しているらしい。断れば、今度こそ殺されるかもしれない」

「『彼岸』が、ですか」

あつの顔が心なしか青ざめている。

「誰だ？ その『彼岸』って。詳細は？」

森羅が首をかしげて僕を見た。とりあえず、軽い説明を加える。

「いまだ残ってる古臭い殺し屋。このごろ鳴りを潜めてたんだけど。噂じゃ海外に行ってたとか聞いてるよ。殺しの腕はいらしい。殺し損ねたのはこの世に生を受けて一度だけ」

「それが、おまえ？」

沈黙で、それに答えた。

「逃げ切れませんよ、次は」

「あつても？」

「あたしでもです」

心底怖そうに言う彼女の肩は確かに震えている。

「ま」

しばらくの沈黙の後、森羅が。珍しく真剣な声で。

「やってみなきゃ、わからないってな」

それは哀しい麻色

「あつー？森羅ー？隼も、どうしたの」

「みんなには言うな」

「何ですか？」

「あの事件はみんなのトラウマなんだよ」

下に降りると、ちさ姉が夕食の準備をしていた。

「熱は。下がった？」

「うん、だいたい。――仕事？」

「……私の仕事だから、気にしないで」

隠しているのが見え見えだ。

「ちさ姉」

「何？」

振り向いたちさ姉。僕がメガネを外していることに、気づかなかった。

「何隠してるのかな。ね、言ってくれないかなあ」

「――！」

がたん、大きな音がする。涼と陸が慌てて降りてくるのが分かる。

「答えて」

「……『彼岸』が」

「『彼岸』が」

「私たちの領域^{シマ}で動き出したの。表の世界には出てきてないけど、昨日仲間がやられた。置き手紙があってね、『あと5日』って」

あと5日。間違^{まちが}うことない、僕の期限。

「なんで黙ってたの。僕だってここの一員だよ」

「……だって」

「ちさ姉の優しさってやつだねー。隼が大嫌いな『彼岸』に、会わせまいとしたんだよー」

「相手が本気でこっちを潰しにかかったら、こっちも本気であつちを粉々にしないとう。そしたらさう、傷つかないですむと思うう？」

「傷つかないわけがないよねー。それでお前、どう思うう？」
僕が、昔のことを思い出すと。

本当に、なんて。

「馬鹿だね、なんて言わないよ。あきれるほど馬鹿だから」
馬鹿なんだろうか。

「せ、先輩」

言うな、と口に出さずに言う。ちさ姉たちが『彼岸』の現れた本当の理由を知れば、何が起こるかわからない。ジェイだって、これを知れば僕を軟禁しかねない。

それほど、必要な力なのだから。傾城は。

僕ではなく、傾城が。

『彼岸』の雇い主がほしがったのも、僕ではない、傾城の力だ。

僕じゃない。

「――ごはん、食べようか。腹が減っては戦は出来ぬ、ってね」

先輩は笑みを浮かべた。ここに来て、ベッドの中で自己紹介したときには明るい人だと思ったのに、そうでもなかった。それはあるとき、驚いていたから、それだけなのだ。ただ、いつ去るかもしれない者に氣遣った、それだけ。

本当は。

彼は、重いものを、たくさんたくさん抱えて、生きているのだ。

それを氣取られぬように、嘘をつき続けて。それが自分の弱点にならぬように。

先輩が笑うとき、それを痛感する。全てを否定した笑み。

それを向けられるたび、心臓の真ん中がずきつと痛む。

あたしは、なんだろうか、その――好きなのかもしれないなかった。

先輩のことが。でも、それを言ったら変わってしまう気がする。何かが。たぶん、もう彼は、あたしを見てくれることはない気がする。

「あつ、梅干とって」

食べ飽きているおかゆを面倒くさそうに咀嚼しながら先輩は、味を変えようと梅干を一つおわんの中に入れた。もともと口の中でおかゆを転がす先輩をそっと眺め、考えを続ける。

好き。今まではまだ、伝えられていた。あの時は、縛られていたけれど、自由だったかもしれない。今は、自由だけれど、縛られている。

矛盾しているけど、矛盾していない。

それが、辛かった。何より、辛かった。

それは美しい紫色

「ねえ、あつ」

「何？」

「村木先輩と付き合ってるの？」

バキッ

「え、なになに」

「……だってさ、理沙子が見たんだよ。あつと村木先輩がおんなじ家に入ってるの」

「あ、うそ」

「ホントホント。ねっ、付き合ってるの？」

「まさか」

「！む、村木、先パー——」

「同じ下宿に住んでるってだけだよ。僕の義母が経営してる下宿に、たまたま綱手さんが入ってきたの。それより、綱手さん。探偵倶楽部で招集かけてるから、来て」

学校では先輩はあたしのことを『綱手さん』と呼ぶ。関わり合いをばらさないために。それは、別にいいのだ。

付き合っているかと聞かれたとき、先輩は即答した。

『まさか』

可能性の全否定、だ。

「綱手さん！もう森羅も待ってるから」

「あ、はい。じゃあみんな、また明日ね」

「ばいばーい」

《あつ》

口には出さず、唇だけで彼は会話する。

《このごろ元気ないけど、どうした》

「……いえ、なんでもないんです」

「独り言いってるように聞こえるよ、綱手さん」

「いいんですー！ぷんだ」

顔を見られないようにそっぽを向く。

「あっそ。分かりました。僕には女心は分かりません」
本当に。

「わかってないんだから」
え？

「せ、センス？」

「はっろろーん☆今日は隼に呼ばれたわけじゃないのよ。所長がよ
んだの」

「というわけだ。さっさと帰るぞ、森羅、ゐつ」

「どーゆーわけだよ」

「意味が分かりませんよ、先輩」

「隼の説明ド下手」

「……はい、すいません、説明するからそんな目で見るのはやめて
くれ」

先輩が折れた。

「これからすることを説明します。というわけで、紫苑よろしく、
つと」

彼の目つきが変わる。紛うことなき、紫苑の目。

「どーも。んで？説明か。今から手伝ってもらうことがあります。
それだけ」

「は？」

「ん？」

「え？」

「――わかった、もう少し詳しく説明しよう。僕はその目が嫌いだ」
無表情の紫苑が、いらいらと顔をしかめ、椅子に行儀悪く座って
説明しだした。

「彼岸について知るの難しい。なんたって個人だからな。個々の
情報は入りづらいし、消されやすい。でも、どう頑張っても消える

ことがなく、手に入れやすいのは？」

「組織情報、か？」

「そ、S。分かってるじゃん。彼岸が入ってる組織を潰す。その方がはつきり言って手間が省けるからね。二度手間はごめんだし。というわけで、潜入――みたいな捜査。S以外は手伝ってほしい」

潜入捜査って、どこに潜入するんだろう。

「何で俺はだめ？」

「お前は女になっても抱き心地が悪いだろ、ごつごつしてて」

「……は」

「潜入先。キャバクラ。一日だけな」

「ちよっ、ヤです、着たくない……！」

「やだやだ言ったら、一生ガーターベルトなんて付けられないわよっ！ほらほらー、これっ位朝飯前になりなさい」

「終わったの？ quint、先生」

外から紫苑が呼ぶ。

「まだなのよー。どうしてもガーターベルトを付けてくれなくて嫌ですっ！だって、だって――」

ガーターベルトは、まだ嫌だ。

「何でだ？ めっ」

つい先輩に戻った声が、外から。

「だって、だって」

「だって？」

「……なるんですよ」

それだけは、よしてほしいのだ。

「え？」

「ガーターベルトつけると、胸がちっちゃくなるんですよ!!」

それは美しい紫色（後書き）

そろそろいいかな——あ、あつですっ！作者さんからの伝言です。作者さん曰く、「第二章の今までのタイトルの中に暗号を隠してますよ」と。解いてみてください！作者さんは簡単だよって言ってます。あ、あたしも頑張ってみよっかな……

それは婀娜な橙色（前書き）

土下座します。コンテストに出す小説を書くのに、随分と時間をかけてしまいました。おかげでまた一ヶ月更新に――させはしません！次こそはっ、次こそはっ！

それは婀娜な橙色

「ッ痛う……」

「ゐっちゃん、容赦ないわね」

「当然の報いです。自分が男だからって、どうでもいいいでしょ！」

「別にそんなこと言ってるわけじゃーごめん」

あたしの振り上げられた手に、先輩は身をすくめて謝る。

「笑う必要、ありますか」

「ゐっちゃん、こわい」

「せーんぱい。答えてくださいよう」

「いや、だから、その」

「なんですか」

「科学的に証明されていないものを信じるのはどうか……はい、笑う必要ありませんでした」

「それでいいんですよ」

「怖いわよー、ゐっちゃん」

「先輩はギターベルトつけてるんですか？」

「見たければ見せるよ」

「っ、いえ、いいです」

「ねえ、これでいいの？ 隼」

「紫苑て呼んでくれませんか？」

「これでいいの？」

「スルーですか……いいですよ。別につけなくても、男が誘えれば別にいいんで」

「逆に襲われても困るしねー」

「その心配はない」

「何ですか、紫苑」

「だって、やられる前にやるだろ」

「――そうですけど」

3人とも似通った格好で話し合っている。

あたしはいかにも水商売初心者。

先生はどう見てもベテラン。

先輩――紫苑は、文句なしの。

「いい感じで店のNO. 1にいそうね。紫苑って」

「客へのサービスもよさそうだし、たくさんお金を落とさせるかんじがします」

「それってほめ言葉？それとも貶し？」

「両方です」

「毒舌ね、ゐつちゃん」

「それじゃあ人気は出ないよ。気づかれない程度に媚びないといけないからね」

「慣れてますね、紫苑」

「そりゃ、ずっとやらされたからね。あとは一種の才能だし」

ワゴン車から降り立つとそこは。

「うわ、ぎらぎらしてますね」

「そういう街だから」

怪しげな看板が所狭しと毒々しく輝く、夜の街だった。

「今から行くお店って、『氷の刃』専用の？」

「情報収集のために作ってもらったお店。主に情報屋が利用できるのが2階。1階は」

裏口から入ると。

「アンダーグラウンドなお客様も入る、絶好の情報収集の場」

それは小さな浅黄色（前書き）

未成年の飲酒を許容する描写がありますが、そんな考えは決してありません。僕は一切、一滴も酒が飲めませんので。みなさんも、二十歳まで、駄目ですよ、絶対に。二十歳になっても僕は飲まない気がしますけど（笑）。

それは小さな浅黄色

「ねえ、お酒、飲みすぎよ？これ以上飲んだら潰れちゃうわ」

「いいんだあ、紫苑、分かってるんだぞ、何がほしいんだよお。酔ってる間なら何でも教えてやるぜえ？」

「あたし、お酒臭い人嫌い」

少し純な素振りを見せれば。くる、な。

「はっ、前は自分も飲んでたじゃねえかあ、随分な嘘つきだな、おいしい。また男を誘うのか？」

耳元で囁かれる。下品な笑いが鼓膜に響く。

「男の傾城のくせに」

笑い返す。あくまでも上品に。

「あら、それを言ってもいいのかしら？死ぬわよ？」

「……分かった、負けたよ。俺の負けだ。はいはい、言います。酔ったふりもやめる。だから、すまん、——ないでくれ」

「それでいいのよ」

純粹に微笑む。飴と鞭だ。分かっていてこの男は乗ってくるのだから、本当に、なんと言うべきか。

「あなたってほんとにばか」

「分かってるよ」

心から笑えてくる。

「——ねえ」

そ、と唇を重ねる。男となんてとは思うが——おそらく相手もそう思っているんだろう——きっと一番いいご褒美だ。今の僕は、キヤバクラ嬢だし。

「ふふ、ご褒美ってことで。ね？ちょっとこっち来ましょう？」

「ちょ、やめて、くださいよお」

「おい、quint。いつ酒飲んだんだよ。ったく、馬鹿か、お前」

「ふへー？」

「『ふへー？』じゃねえ。酒弱いくせに飲みやがって。未成年だろうが」

「紫苑だってー、弱いじゃないですかー」
重い。健康的に重い。

「酒には強いんだよ、僕。駄目なのはあれだ、ビールの中に入れられた薬のせい。死なない程度に加減して入れてあった。今でも思い出すとむかむかするね。というか、あのビール、元から僕がちびちび飲んでたし」

未成年なのに、と先生が後ろから咎める声は無視しよう。

「ほふー。先輩は、ずるいですねー」

「何がだよ。あと紫苑だ」

「ちよつと、なんでそんなに機嫌悪いのよ」

「先生には分かりませんよ」

誰もわからないと思う。独りよがりなんかじゃなく、客観的に見ても、ほんとうに。余命一ヶ月の、僕と同年の少年くらいなら、わかってくれるかもしれないが。

「ずるいんですよ、先輩は」

「何が」

「だって――」

だって？

すー、すー

「落ちやがった……」

「いわゆる寝オチ」

「ベタすぎて調子狂うよ……」

「なかなか見ないわね」

「いつもおかしなフラグしか立たなかったのに、ゐつの手にかかる
と何でもベタになるんだから、まさに魔法ですよね」

「あ、隼に戻ってる？」

「もう紫苑になっている気も失せましたよ——」

僕は、家路に着いた。

帰ったのは夜明けごろ。

ソファに眠ってしまったあつだけ寝かせ、起きてきた他のメンバーに情報を伝える。

「今回は厄介そうだよ。表にまで介入しそうだ」

僕のこの一言に、空気がぐっと冷え込む。

「しかも、世界中に展開してる、イギリスに本社が置かれている組織にね」

「名前は？」

「AAA製薬」

AAA製薬——決して某音楽グループではない——AAAとは何の略なのか、実は社員すらもよく知らない、しかし世界中に広く大量に分布している製薬会社だ。

昔、この会社はこんな噂が流れたこともあった。

『AAAの略は、殺し屋の起^たてた協会『an assassin
association』からきていると。——なんとネーミング
センスの欠片もない名前だと思ったことがある。

その噂は、本当なのかもしれない。

「これは、組織全部が立ち上がらないときつくはない？」

「えー、またリルにあうの、メンドウ」

「リルが可哀相じゃないか。せめてボス面倒くさいとか言っとけば？」

「————言っとくけど」

「ん？」

「隼の言った台詞のほうが、何倍も傷付くと思う」

それは小さな浅黄色（後書き）

英語が使えないのに英語を使った作者です。大馬鹿者です。こないだ英語で赤点取ったことをつるんと忘れています。

間違っていたら教えてください。直します！

では、これからもよろしくお願いします。

それは冷たい銀色

んー？ああ、そうだな。俺が呼んだんだもんな。
相談があるんだ。

最近、隼の様子がおかしいと思う。いや、前から変な行動を取るやつではあったけどさ。それは当たり前だと思って俺は許容してるし。

そういうことじゃなくてー、わかる？何ていうんだろ、冷たい…殺気ににたかんじだな。それがずっと出てるんだ。どんなに笑ってても、こっちが薄ら寒くなってくるほどの気を出してくる。はっきり言って、怖いぜ。下手なことしたら、即やられる。

あれは、隼じゃない。

あれは――

「森羅ー？なにやってるんだ？置いてくぞ」

「え、あ、勘弁。お前が行ったら、この部室閉めるんだろ。俺をここに閉じ込める気かよ」

「早く来いよー、僕はもう帰りたいんだ」

「すまん。今行く」

ささっと机の上を片付け、かばんに突っ込む。そのかばんを肩に引っ掛けると、俺は隼のいるほうに走った。

「明朗堂行こ。今日はパーティー開くから。あ、森羅も来るか？」

「いいのか？」

「いいんだよ、森羅だってメンバーなんだし」
優しく笑う隼。

つくづく、作り物の表情かおだなあと思うよ。

ただの作り物だ。以前は、俺には隼の本心を見せてくれ――ることもあったのにさあ。自信はある。俺は、少なくとも学校中で、誰

より隼のことを理解しているって。隼は俺に一番心を開いてくれているって。そんな自信。

なのに。

今、俺に向ける隼の笑顔は、嘘なんだ。

「なに考え事してるんだよ。コーヒーゼリーはいくつくらいにしとくかな……」

「何人来るわけ？全体の3分の1くらいはどうだ」

「まあ、そんなくらいだよな。よし、店員さん」

わかってない。全然わかってない。

怖いんだ。隼が。自分のことが何にも見えなくなってきた、あの隼が。あの隼のままじゃ、いつかあいつは――

――化け物とは言わねえよ。隼を化け物呼ばわりするやつはたとえ俺自身でも許さない。

でも、俺らが止めないと、そういう風になっちまう、かもしれない。

今のうちなんだ、止めるのは。隼が暴走して、止められるやつなんていない。

もし。もしも、隼が暴走を始めたら。

その光景は、地獄だろうよ。

「森羅、さっきから黙りこくって。どっか悪いのか？荷物、持つぞ」

「いや。考え事。だから、気にすんな」

「――、ふーん」

馬鹿みたいなことだって分かってるよ。

そんなことないって、信じたいよ。

でもな、

それでも、

ありえるんじゃないかって、
そんな下らないこと思っちゃったんだ。
親友失格だよな、俺。
それでも、

「そっか」

はっきり、

「じゃあさ、どうして」

信じられないんだよ、

「僕のこと、」

隼^{あいつ}が、

「疑ってるんだ？」

壊れないって。

隼は、寂しそうな顔で、優しく笑って、表情を、面みたいに、引き剥がして、言い放った。

「いいよ、別に」

あんどき、俺ってどんな表情をしてたのかな？分からない、分からないんだ。

俺は絶対、あいつを傷つけたんだ。
気にしてないように振る舞ってるけど、きっと。

なあ、リル——俺、どうすればいいんだ？
俺はあいつに、何をしてやれるんだ？
もう、分かんねえんだよ。

それは俺んだ闇色（前書き）

暗いです。ひたすら暗いです。——でも、それもあるから氷の刃なんだと思っています。人間綺麗なばかりじゃないことを表したかったので、暗いです。

我慢してください。作者がこんなこと、言うべきじゃないですけど。

それは俺んだ闇色

「しおーん、ちょっと」

「何？リル」

「お前の階級^{ランク}、上げるから」

「は？」

「今日から最上級。あーゆーおーけー？」

「ぜんっぜん。つうかりル、仮にもイギリス人だろ。母国語くらいちゃんと喋れ」

——まただ。

俺と目を合わせてくれない。

「なんとなくー。ってのは嘘で」

いったん言葉を切り、無表情になるリル。

「お前が危険だと、俺が認識したからだよ、紫苑」

「なんで」

「今、どんな目をしてお前は俺を見てると思う？」

「憎悪。すべてのものを拒絶し、排除する。そんな目だ。きつとお前は、隙さえあれば俺を誘惑して、俺を殺すぜ？」

「え？何もいえないだろ。だって本当のことだもんな」

「それは」

「本当、だろ。俺らまで殺すつもりで、お前は突っ走ろうとしてる。はつきり言って、このままじゃお前壊れるぞ。精神的に。分かってんのか」

「そんなこと」

「ある。——うわ、すっごい殺気。主に刃向かう気か？俺に買われてる傾城のくせに」

「……………おい」

「おお、こわ。そんなに傾城って呼ばれるのが嫌か。そうかそうか。自分の血が嫌いなんだ。自分を嫌悪する自分が嫌いなんだ。自分が真っ黒だと、理解している自分が嫌い。エゴの塊でしかない、そんな自分が」

「うるさい」

「うるさかったら？どうする、俺を殺すか？お前ならできるだろうなあ。俺なんてひとひねりか。5年前のミラみたい」

「うるさい！」

「ほら。俺のペースに流された。今のお前に戦うのなんて無理だ」

「……はは、下手に人前で口論すべきじゃないよね、僕たち」

「え？」

「ほら、周りの人たちが――所長だって僕らの気に吞まれてる。ほんと、僕らって厄介だね」

ああ。

形勢逆転だ。

「何が」

「どんな言葉も人を畏れさせる。仲良くしたいと思っても、君は人から畏怖される存在なんだ。そんな中で、一人だけの理解者を持った」

「やめろ」

「それが僕なんでしょう？ばっかみたい。僕は傾城なのにね。人の望んだとおりになる、傾城なのに」

「あ」

「君が散々言ってる傾城の力に、初めから君はほだされてるわけだ。どうりで、先代が死んでから弱体化の一途をたどってるわけだ。君みたいな奴が頭首なんじゃね」

「うるせえ」

「ほら。立場変わったよ？君は僕を侮りすぎてる」

「お前も、俺を侮りすぎたな」

「は？」

は？

「実際は違うだろう？ お前の先代である蒼月と赤月が死んでから、この組織は弱体化を始めたんだ。お前の力が強すぎるからと、俺らが押さえつけるのに必死だったからな」

おい、リル、少し言い過ぎだつて。

もう止めとけよ、おい！

「……」

「つまり、お前が初めからマインドコントロールを身に付けていればよかっただけの話だったんだ。なのに、小さいお前は心を開かずにいるから、ぐずぐずと時間がかかって。あんな、はっきり言って止めろつて――」

「あっそ。分かった。よく分かった――」

「二人とも、もうやめて――」

所長がやっと二人を止めにかかる。

遅い。

「そうっすよ、なー？ 紫苑も、落ち着けよー」

陸も、遅い。

「リル、紫苑は少し疲れてるみたいなんだ。このごろろくに休めてなくて、だから、少しいらいらしてるだけなんだ」

涼、も。

でも、たぶん普段なら二人を止められるであろう俺の言葉は、今日は届かない。特に、紫苑には。

「僕は――」

「お前は――」

「「邪魔者」」

「なんだろ」

「なんだよ」

ああ、言ってしまった。

はっと正氣に戻ったリルが慌てふためく。心にもないことを言ったのだ、当たり前だろう。

言わせた原因であるやつは、どこでもないところを見ている。

「ほら、僕の勝ちだ。……リルの本心じゃないことくらい分かってる。僕が植えつけたんだから」

「紫苑」

「本当に、ごめん。僕なんかのエゴのために、僕はみんなを傷つける」

「……………」

「公園行ってくるね。すこし頭冷ましたいから」

そうやって去ろうとする背中を、俺たちは追えない。

「先輩は、邪魔者じゃないですよ」

そう思った。

でも、そういえば、こっちはこの子がいたんだっけ。

立てられたフラグを全て蹴倒すことすらできてしまう、女の子。

「先輩は、大事な家族ですもん」

綱手あつ。ただいま15歳。

それは苦い金色

「先輩は言いましたよ？あたしに、『おかえり』って。ねえ、あれは家族だからじゃないんですか？」

「だから、なんだ？」

口先で隼に、紫苑に、勝てるものはいない。

「だから、邪魔者じゃないんです。みんなを傷つけるわけじゃないんです。わかりますか」

「まったく」

「本当の家族なら、その存在を疎んだりはしませんよ。ね、あたしだから、説得力を持つ言葉です」

——そうか。

あつちゃんは、親といながらにして家族はなかった。それを気まぐれで前の事件の女が拾って育てた。

あつちゃんに、家族といえるような家族はいなかったのだ。

ここ以外。

「それでも、血はどうしようもない。僕は」

「傾城が、何ですか。関係ないです」

「関係ないで切り捨てた——」

「関係ないで済むことじゃねえんだって」

「関係ないんです。そんなの。だって、傾城じゃなくなたって先輩はあたしたちを拒絶するんでしょう？」

「は？」

「先輩は、あたしたちを拒絶してる。あたしたちに心を見せない。本当を見せてくれない」

「何言ってるんだ」

「本当です」

「だんだん話がずれてきてる」

「ずれてません。ずらすのは貴方です」

「……」

「前、あたし言いましたよね。先輩はずるいって。何でか分かりますか」

「わからない」

「それが、ずるいって言ったんです。あたしたちのことは何でも分かかって、助けてくれるのに、あたしたちには何もさせてくれない。自分のことには何一つ触れさせてくれない。それがずるいっていうんです」

「触れて、なんになる？自分で一杯いっぱいになってる、それなのに。触れて、支えられるとでも？知って、どうにかなるとでも？そんな予定調和が、本当にあるって？」

「あります」

「そんなの机上の空論だろ」

「いいえ」

「どっからその根拠はくるんだ」

「経験から、です」

「経験？」

「先輩はあたしを受け入れてくれましたもん。先輩自身が一杯いっぱいだったのに、先輩はあたしを受け入れました。ねっ」

「――別に」

「ね。そうでしょう。先輩は今、自分で自分が抑えられないから、だからみんなに八つ当たりしたいだけです。だったら受け入れますよ。かまいませんよ」

「……はは、やけっぱちだな」

そう言っ

て。ああ。そう言っ

て。ほーら、笑ってくれた」

「だって、っ……ははっ！お前、ど真剣に、無表情で、つくく、ち

よ、笑い止まんねえ、――！」

「ごめん、私には笑いどころが分からない」

「「大丈夫ー、俺たちもだから」」

「すまん、俺も、わからない」

分からない。笑いどころは全くなかったはずだ。

でも、まあ、いいか。

「はー、なんか、よく分からんが吹っ切れた。何で僕、こんなことをうじうじと考えてたんだろう」

「そうですよー。人間そんなもんです」

「どんなもんだよ」

「えへへー、分かりません」

「うん、僕も分からん」

ちらと隼がこちらを見た。顔には笑みが浮かんでいる。本当、だった。

「俺もわかんねえよ。隼、早く理解して説明してくれ」

「無理だって」

フラグぶち壊しの少女は、いろんなものを壊していく。

俺たちの、隼の、みんなのわだかまりさえも。

どうやらここは仲直りして――というフラグが立っているはずなのだが。

「ね。あ、ゼリー食べましょう！昨日結局食べなかったじゃありませんかー」

……また、ぶち壊した。

「つーか、冷静に考えると隼とゐつちゃんの話、かみ合ってなかっ

たよなあ」

「？森羅、食べないのか」

「いや、さあ」

「お前、時々馬鹿だよなあ」

「は？」

いい。これでも。これが。

「あー、幸せしあわせ」

それは苦い金色（後書き）

「次こそっ、次こそはA A Aとっ！対決ですよ。彼岸と。んでもってk（殴）」

「何でも喋るな、馬鹿が」

「いったー！ひどいです、紫苑」

「q u i n tが馬鹿なんだろ。仕方ない」

「むー」

「まあ、ええと、お楽しみに……」

「お楽しみにっ！」

それは重い灰色

「まあ、幸せモードに浸るのもこれでしばらくお預けってことで。全面戦争といこう」

「リル……」

全面戦争、か。

「僕は休学届けだすかな。んー。あつはどうしよう」
本当に、戦争だ。

「あ、あたしも」

「その成績で休学届けだすと、確実に留年するぞ」
あつは、休学届けを出すべきでないし。

「じゃあどうするっていうんですか」

「こっちにおびき出せばいい。もう隠せないから」

「何を」

「僕が標的だってこと。分かかってリルはここに来たんだろ。分か
つてきて、自分から言わせようとした。違うか？」

「さあな」

「そうなんじゃん」

ちようどそのとき、控えめな電話のベルが鳴った。

「はい、鈴木です」

《リルか隼出しなさい》

「……どちらさまですか？」

《智佐子も鈍ったわねー。あたしのこと、わすれたの？》

「いや、だから」

《いいから代わって》

「俺が出る。どっかで聞いたことある声だ」

いきなりのわけが分からない人物の登場である。マジで困るから。

「はい、代わりました、リルです」

《すっかりしおらしくなったこと。覚えてないの？あたしのこと。》

んー、違うわね。あたしたちの、こと」

「《忘れた？ 金田一美智。よく遊んだじゃない、組織同士で》」

がちやり、万全なはずのセキュリティをくぐり抜け。

「忘れたって言ったらぶん殴って思い出させてあげるけど」

僕は久しぶりに、懐かしい顔を見た。すっかり、変わってしまっていたけれど。

「——もうとつくに死んだとばかり思っていたんだが？ Home S」

「やめてよ、その名前。あたしは名探偵じゃない」

まるで神様が創りあげたような女の子だ。……綺麗だ。

でも、特徴は変わっていない。肩甲骨まで伸びるポニーテール、右目には銀の片眼鏡^{モノクル}、右足の動きがすこしぎこちない。色に例えるなら燃えるような、匂いたつような、艶やかな赤。

「情報屋から聞いたわよ。AAAと戦争くむんですって？」

「あ、この子があつちゃん？ 綱手あつ。戦闘能力にかけては横に出るものはいない、とかいう」

「うわー、リルも老けたもんね。そんなんじゃあたしたちにやられちゃうわよ？」

「あー！ 隼だ、ますます可愛くなってるー！ どれどれ、眼鏡を外すとー？」

眼鏡をいともたやすく外される。そうして僕の目を、直視した。

「ふーん、強くなってる。あ、でもこれでもね、あたしだって強くなったから。そう簡単には貴方に飲まれないわよ」

「やめてくださいよ、買いかぶらないでください」

「……あたしに敬語使うんだ」

「——死にたくないから、撤回する」

「よろしい」

金田一美智。探偵。かつてその右目と右足をなくし、目のほうは移植、足のほうは義足を使って、通常の人よりも優れた動きをする。彼女は他に、2人の少女と共にある協会を開いた。

「『三羽の鳥』が、何の用だ」

『三羽の鳥』。彼女たちを鳥に例え、三頭政治のように力を分散させて部下を率いる、強大な組織だ。彼女たちがこの協会を作ったのは、まだ僕が7歳、彼女も7歳のときだった。

「彼岸に会うんだって？ 無茶無茶。止めときなさい」

「何でだよ」

「あいつはあたしたちが片付けたから。会う？」

「……は？」

「彼岸は、こちらが片づけました。お会いになりますか？ つつてんの」

彼女の力はとても強い。金田一美智ただ一人で、僕たち氷の刃が壊滅させられてしまうであろう程に。

「あとAAAにも話し付けといたんだけど、話し合いの場を持ちませんか？」

きつと、彼女一人でAAAも壊滅させられるのだろう。

「あのね、あんたらの領域シマで何やっても、三羽あたしたちの鳥は何も言わないわよ？ でもね、あんたたちはきつとあたしらの領域シマにも被害を及ぼす。それは許せないのよ」

「……確かに、被害を及ぼすかもしれないな。それで？ 飛び火しないように、首を突っ込んでわけて？」

「そういうこと。分かっているじゃない、隼。だから、話し合いの場を設けてあげたってわけ。のる？ 乗らない？」

それは重い灰色（後書き）

金田一美智っていうのは、僕が一番最初に生んだキャラクターです。右目右足が不自由な、女の子の探偵。この『三羽の鳥』の話も、いつか出しているかと思っています。

というか、ただいま絶賛スランプ中です。誰か助けて。

それは遠い臙脂色

「毎回思うんだけどさー」

「何よ」

「なんで紫苑にはこんなに味方が多いんだろうね」

「しかも紫苑が、全く力を使っていないっていうのに、だよー」

「人柄、とかじゃない？優しいんだし」

「そっかー」

「でもさ」

「「なんで俺らの隣にあんたがいるわけー？美智」」

薄暗い広いバーの中、さまざまな人間がグループを作って談笑をしている。そのなかで『氷の刃』はバーの端にいた。

「ここがあたしの定位置だもの、しかたないでしょう。……ランソ
ンいただける？」

「駄目。未成年がお酒を飲むもんじゃありません」

「けち。もう、ミルクティーちょうだい」

「一気に子供っぽくなるのね」

「オレンジジュースの智佐子に言われたくないわ。それに、言うなら隼にも言ってよ。もう手エつけてるわよ」

「付き合いの一^な嘗め。美智は本気で飲もうとしてるだろ」

ふてくされたようにミルクティーに手をつける美智。

「いいわよ。家に帰ってから飲むー。まったく」

立ち上がる。腰に手を当てる。

「ここで鬭争おこしたら、二つの組織もろとも潰すわよ。その条件は、飲むわね」

「りょーかいっと」

「随分軽いのね」

だってねー、とR。

「俺らは基本的に『先に手を出すことはしない』方針だからさー」

AAAみたく攻撃的じゃないから。恨むなら、AAAを恨めてね。」

どうしてもやさそうに小さくため息をつき、美智は再び席についた。「あいあい、分かった。……では、ごゆるりと」

そう言って、綺麗な右手を向けた先には。

「はぁーい♪わー！紫苑だよっ、紫苑！」

そこにいたのは。

「なんで、お前がここにいんの」

「ねー、せっかくの再会なんだよ？あの時みたく友好的に喋ろうよー」

「……こいつに会うなんてな」

「「紫苑ー？リル？こいつ誰？」」

「ごめん、私も分からないんだけど」

「……あたしもさっぱりです」

はじめてこいつを見た人には、こいつは少女という印象を持つだろう。そして、少年と分かったとき、彼のことを好青年と思うだろう。その本性を知らずに。

もう会わないと思っていた。

っーか会いたくなかった。

最悪の存在。

「はははーん、僕のこと忘れた？ほらー、僕だよ僕、」

「オレオレ詐欺に興味はない」

「もー、茶化しちゃって。ぼーく。AAAのボスはこの、アラン・マクスウェル」

アラン・マクスウェル。イギリス留学中に会った……、なんと言えばいいのか……

「馬鹿がいる……」

「っーかさー、もうちょっと面白みがほしーよねー。例えばー、俺

らの仲間がボスだったりさー」

「そーそー、なんかいちいち新キャラ登場しすぎだと思うよー」

「しかたないじゃない。尺の関係よ、きつと」

やめーい！という怒声が聞こえた気がしたが、気にしないことにする。

「ひさしぶるるー、しおーん、りるー」

可愛い顔で、アランは不思議な日本語をはっした。

それは難い鈍色

嫌な、予感がした。

「出た……」

「まじやめろって……」

「アラン、はっきり言って気持ち悪いから今すぐその顔をやめてくれ」

「はあ？なに言ってるんだよ」

ちなみにこの会話、A A A同士での会話である。けして氷の刃は関与していない。

「まあ、あれだ。仲間内でやめようといったことには従ってくれ！オレはお前のその猫なで声がいっ嫌いなんだ！」

「えー、可愛くない？ほらー、ねっ」

「やめろ……」

漫才かよ。

「ごく真面目な組織内の会話だよ？仲いいでしょー」

心読むなよ。

「だってー、紫苑可愛いんだもん」

可愛いって柄じゃないんだけど。

「それよりさー」

ん？

「ちゃんと声に出して会話しようよ……ねー」

うざっ。

「声に出せたら！」

仕方ない。僕はしぶしぶ口を開く。

「うっぎ。（笑）（かっこわるい）」

「（笑）とか、わざわざ口に出すようなもんじゃないだろ！」
じゃあなんだ、こうすればいいのか。

「うっぜ。
wwわらわら」

「wwとか……以下同文！僕をいじって楽しいとか、なに、あれなの？ドSなの？」

「――紫苑。普通に喋ろうぜ」

「そうだね」

「なんでリルには普通なのさ！」

いいぞー、兄ちゃん！なんて威勢のいい言葉が聞こえてきた。僕らのことを漫才集団か何かだと思っているのだろう、おひねりを投げってくる。

もらえるものはドラッグと借金のかたと死体以外はもらっておけな性分なので、もらう。

「ありがと！」

「あ、ずる！僕もほしい」

「よくしらねーけど、AAAのボスがなにけち臭いこと言ってるんだよ……」

再びこの広いバーに笑いが波打つ。本当にさまざまな年代の人がいる。いい雰囲気の場所だ。これからは何もないときにここに来たいと思う。

「じゃあちゃっちゃと話し終わらせるー。うんとね、僕がしてほしいのは、彼岸を僕らに返すこと。または」

AAA全員が口を揃え、

『村木紫苑を、AAAに引き渡すこと。できないなら、氷の刃を潰す』

臨戦態勢。

予感的中。

「どっちも嫌かなー。つーか、彼岸をさらったのは『三羽の鳥』だぜ？」

「関係ないよ」

関係大ありだ、とRが愚痴る。

「せめて別のところでやりましょうよ。一般人を巻き込むのはよくないわ」

「一般人なんか知らないよ」

知らないじゃ済ませられないでしょう、とぼやく所長。

――。風が起きた。

「やめましょうよ。あなただって裏の人間なんですよね？理由もなく他の世界に干渉するとうなるかくらい知ってるでしょう」

「……！ほえー、すごいすごい」

いつのまにかアランの後ろを取り、優しげな声で凄む quint。さすが、だ。きっと僕では、いや絶対、アランの後ろを取るなどできない。quintだから、quintにしかできないだろう。彼女だからこそ、できる。彼女は強いから。僕なんかより、全てにおいて、ずっと、ずっと。

「んー、でもなー。場所移動するのがめんどくさい。ここでいいや」
細長い光が、きらりと光った。

「みんな、下手に動かないでね。死ぬから」

僕は冷静に、みんなに指示を下した。

彼の使う手は、もう知ってる。

あれにどれだけ悩まされ、いらついてきたことか。

あれで何人が死んで、何人が身体の一部を失ったことか。

僕自身、首を持っていかれそうになったことがある。今思い出すだけでもひやひやする。

「上手くなったんだよー。ねー、ほめてほめて♪」

アランがにっこり笑って両手を前に突き出し、革の手袋に包まれた手を握る。

するり、空気が動いた。

きしり、身体が動かなくなる。

「説明しよう！」

「アランは日本のとある小説にはまり」

「そこに出てきた糸の操り師にあこがれ」

「その術を身につけてしまったのだ！」

自分たちも押さえつけられてしまったというにもかかわらず、A Aの人間たちはのんびりと状況説明をしている。さすが殺し屋の集まりなだけはある。しかし、ネタが古い……。

「ほら。どうする？」

わきゅわきゅと音を立てて手が握られるたびに、糸が身体に食い込む。

どうする、さあ。

一般人がいる前で、何かをするわけにもいかない。

かといって、このままでは全員殺される。そうしかねない男なのだ。アランは。

どうする。どうする。

僕は強く唇を噛んだ。

それは易い花色

ふ、と。

「え……?」

「兄ちゃんも優しいんだなー。氷の刃にいるなんてもったいない」

「おい、アラン、だっけか? その糸引いてみな、お前が取り返した
がった彼岸の五体を^は刎ねることになるぜ」

一般の人たちに巻きついたはずの糸は全て、いつさいの表情を表
さないマスクの男の体中に巻きついていて。かわいそうなほどぐる
ぐる巻きだ。

「彼岸にはうちのやつらも何人かやられてるもんでね。意趣返しす
るのは氷の刃だけじゃない」

「私ら『三羽の鳥』だって、彼岸には恨みがあるのよ」

あれ、一般人、だったよな。

「よおやってくれはったなあ、AAAはん」

「わざわざ俺らを呼びつけるなんて、何の騒ぎかと思ったよ、A^アq
uila^{クイラ}」

「その呼び方好きじゃないわね……普通に美智って呼んでよ」

「いいじゃないか。誇り高き^{わし}鷲。君を象徴する鳥。似合いだと思う
けれど?」

「似合うのと好き嫌いは違うの」

「なあ、Corvus^{コルウス}、君もそう思わないか」

「似合うとは思いますが、人の好き嫌いとは別ですよ。ちなみに私
もその呼び名は好きじゃありません。きちんと智恵と呼んでくださ
い」

「ふむ、美しき^{からす}鴉も好きじゃなかったか。じゃあ君は? Uila^{ウルラ}」

「僕はどうでもいいよ。でもやっぱり名前のほうが好きかなー、ね、
真紀って呼んでね」

「……賢者の梟^{ふくろう}も、駄目かい……」

とことん女子にふられている彼のことは一旦放っておいて。

「――聞いているかい？ 美智、もしかしてここにいる人たちって……」

「全員三羽の鳥に決まってるでしょう。ここは三羽の鳥の集会所なんだから」

「ですよねー……」

だよな、一般人が来るところに美智が僕らを連れてくるわけないよな。

でも、この人たち凄いな。一般人にしか見えなかった。

さすが、三羽の鳥といったところか。

こういうところからも、格の違いが出るような気がする。

「喧嘩両成敗……っていいところだけれど、どう見てもこれ、悪いのってA A Aよねー」

「ですね」

「思う」

しかもリーダーが勢ぞろいとは。絶世の美女の両脇に、美しい彫刻のような少女と、可愛い花のような少女がいて、そこだけがスポットライトに当てられたように輝く。

「三羽の鳥って、怖いんだねー……」

持っているものを、考慮しなければ。

美智が持っているのは……カッターだ。むき出しの刃を器用にくるくるもてあそんでいる。

智恵が持っているのは……鉛筆か。勤勉な彼女らしい。

真紀が持っているのは……ペットボトル。先ほどから全く飲んでいない。

……確かに、怖い。

「さて、刻まれない？」と美智。

「それとも、突き刺されたいですか？」と智恵。

「何なら、木っ端微塵になるって選択肢もあるけど」と真紀。

「なるほどー、美智はナイフ、智恵は針、真紀は……ねー、爆弾？」

「うん。僕の特製爆弾だから、被害は最小、でも確実に一人の人間を死に貶めるっていう夢のような爆弾だよ！」

無造作にペットボトルを振り、にっこり笑う。ああ、聞いたことがある。三羽の鳥の中で、『梟』と呼ばれる夜明真紀よあけまきは、組織の中でも指折りの。

「この爆弾魔が……お店少しでも壊したらちゃんと弁償するのよ？」
「大丈夫だよ！信じてて！」

……なにが大丈夫なんだろうか。

「ふふ、どうする？」

三人の女神が、三様に微笑む。

「「あー……」」

最高に美しい脅し。敵対していたボスたち。顔を見合わせる。困ったように笑う。

両者、顔を引きつらせた。

それは堅い銅（あかがね）色

「俺は何もするつもりなんてないぞ、はじめから」

リルはいかにも外人らしく肩をすくめてみせ、降参の意を表す。
三羽の鳥に抗おうなんて、そんな傲慢さは持ち合わせていないからだ。

「氷が鳥に取り込まれるなんざア、まっぴらごめんだアね」

……訂正しよう。リルは外人だが、時々それを疑うことがある。
べらんめえ口調が非常に得意だからだ。ん？べらんめえでもないのか。じゃあなんなんだ、あれは。

「僕も……やめるよ。だから怒らないでえ、tertium de
ae（三人の女神）」

女神。まさにふさわしい。石像に命を吹き込んだかのように生き
生きと動く彼女らは女神のように美しい。そしてその力の絶大さと
きたら、運命神も尾を巻いて逃げるほどだ。って、あ、運命神って
尻尾ないな。

「そうだなあ、許してあげてもいいんじゃない？美智」

「いいんじゃないでしょうか。私も同意見です」

「じゃあ落とし前はとうつけるの。そこが甘いつて言ってるの。充
分分かってるんでしょ。甘さは身を滅ぼすって」

三羽の鳥の、話が始まる。

「でもさあ」

「なに？」

「この二つの組織は生かしておかないと。氷の刃もAAAも、表の
社会に深く干渉してしまった組織は潰しちゃいけないって言った
じゃない」

美智を真紀が説得する。

「それに、です」

「それに？」

「借りを作っておくと、利用しやすそうですよ」

続けて、美智を智恵が説得する。……利用しやすいとか、本人たちの前で言うべきではないだろう。

「それもそうかも知ねえ。このボンボンのお嬢さんたちでもそれくらいは分かるわよね」

むっとする智恵と真紀。この二人、実はいわゆるご令嬢だ。智恵は大会社の娘――いろいろ事情はあるらしいが――であり、真紀は世界的に有名な財閥の、なんと当主だ。名前を出すと説明がややこしいからはぶくね、ごめん。

「ボンボンって言われるの嫌い」

「私も言われたくありません」

「ごめん。謝る。悪気はないのよ。ほら、根っからの毒舌だし」

自覚してるならすこしは自重してほしい……。

「話を続けましょう。落とし前はつけないといけないでしょ。特に彼岸、あんたはね」

ぐるぐる巻きの男に刃を滑らせる。

ぴいん　ぴいん

ギターの弦や弓の弦が切れたときのような、そんな音だ。音だけではない。まさに弦のように張られた糸が、普通のカッターによって切られていくのだ。

「どうつけてくれる？あんたはつれてくところがいっぱいあるのよ。そこ全部にあんたの五体をばらしたやつでも送る？大丈夫よ、あたしの刃の切れ味はお墨付き。こんなカッターじゃなくて、大事に使ってる日本刀で切ってあげるわ。綺麗に切れないの嫌いだから、一部分切るたびに、丁寧に脂を落として。気絶なんてさせてあげないから。痛みを感じても失神できないように切ってあげるの。どう？至福のときってこのことを言うんじゃない？あなたは、あなたの相棒と似た形状のもので切られて、」

美智は手を大きく広げた。まるで背中中の翼を広げたかのように。

「死ぬの」

そうして、笑った。

次の言葉で、僕らは逃げ出したくなった。

「ああ、ときどき制御きかなくなるときもあるから、あたしがこの人の何かを口にしたら止めてよね」

何かを口にするって、それって。

「人を喰うってことですか」

「そゆこと」

小さい頃は、そんなやつじゃあなかった。少しは疑り深いやつだったけれど、人を喰らうなんて、そんなことするやつじゃなかった。まだ幼児体型だが充分に綺麗だったあの美智はどこに行った。ちょっと憎らしいところもあったけれど純粹だった美智はどこへ行った。……なあ、美智。

「冗談よ。喰うわけないでしょこんなまずいの。しかも人の血を吸った肌を？ 勘弁」

……………冗談でよかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2204o/>

空を染めて

2012年1月4日15時53分発行